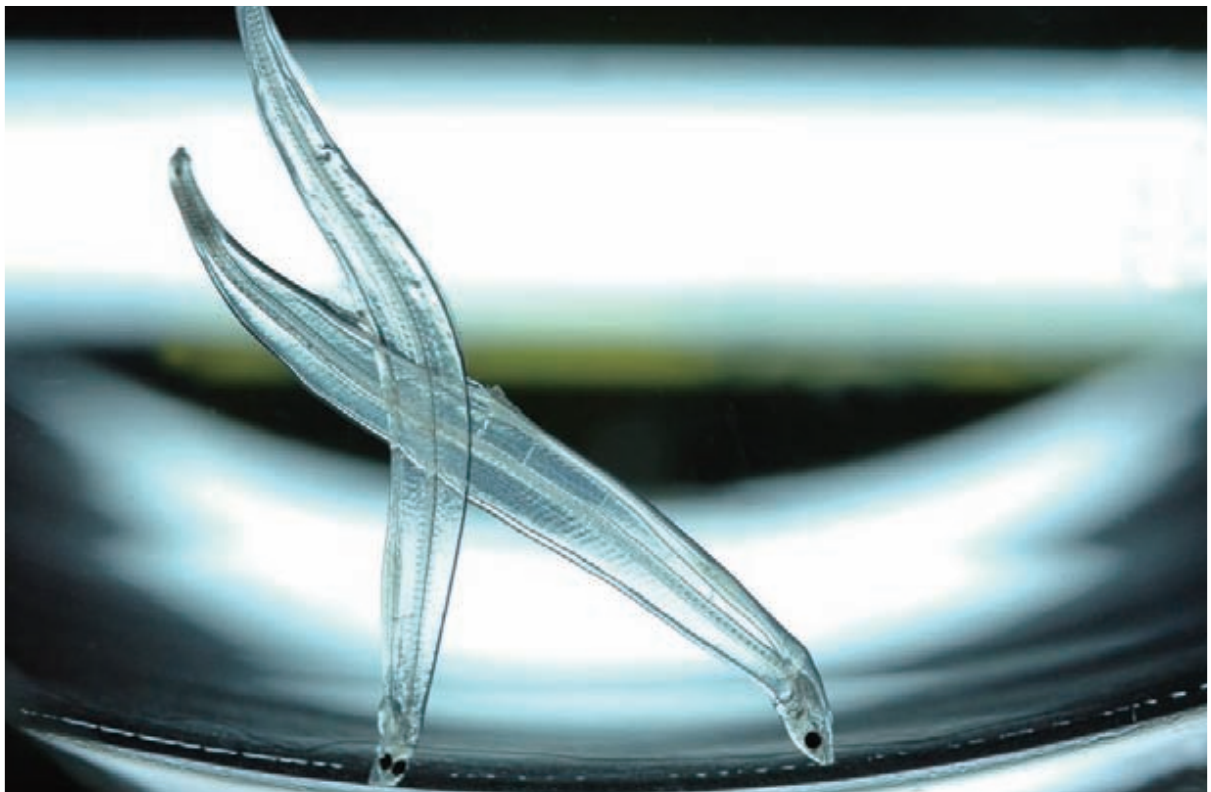


学内広報

for communication across today



©Yoshio Yamada

特集： ■ 「Todai Research」始めました。

2012.3.26

No. 1423

2011年10月21日、東大の研究紹介サイト「Todai Research」がスタートしました。みなさん、もうご覧になりましたか？今回の特集では、Todai Researchの説明だけでなく、実際に掲載されている記事をちょっとだけご紹介します。「そんなサイト全然知らなかった」という方も、「もちろん毎日読んでます」という方も、Todai Researchの魅力を感じとってください！

Feature Stories

知の「蓄積」

毎月1本更新される少し長めの特集記事です。総合大学ならではの分野横断的な研究や、長い時間かけて受け継がれてきた研究、国際的な大規模実験など、東大だからこそ得られた成果をたっぷりご紹介します。

Research Highlights

知の「最先端」

毎週1本更新される論文ハイライトです。最新の研究成果を、一つの画像と短い文章で紹介します。読者の方がより詳しい情報にたどりつけるよう、プレスリリースや原論文、部局ホームページなど、関連するサイトのURLも紹介しています。

Research Information

プレスリリース

研究成果のプレスリリースはすべてここからご覧になります。実は東大の研究成果リリースは一年で250本を越えます。新聞で東大の研究を目にした時、ここでリリース文をチェックするのも面白いかも。

どんなサイト？

Todai Researchが目指すのは、全学の研究成果を紹介・アーカイブする東大の「研究のショーウィンドウ」。毎日のように発信されるプレスリリース一覧の他、「蓄積」と「最先端」をキーワードにした記事コンテンツが（ほぼ）毎週更新されています。現在は理系の研究が中心ですが、少しずつ文系の研究記事も増やしていく予定です。





Twitter・Facebook RSSでも読めます！

Todai Researchの更新情報は、東大公式TwitterとFacebook、RSSで配信されています。ぜひご登録ください！

公式 Facebook

(和) 東京大学 | Todai

(英) The University of Tokyo | Todai

公式 Twitter

(和) @ Todai_News (英) @ Todai_News_en

日本語 English

RSS Twitter Facebook

Search at Todai Archive About

人気記事

- 酸素は地球がいつどのように登場したのか
- 耳が光って血糖値をお知らせ
- 性フェロモンに対する好みを変更する遺伝子をカイコで発見
- ポツリオコックスは石油で代わるか
- きままな天才児を手なずける
- 抗原に結合すると光る抗体の作製に成功
- 恋の相手は遺伝子で決まる
- 新しい二次元ポロジカル絶縁体の発見
- 「量子もつれ」を操る
- 免疫細胞を誘導するセグメント細菌の全ゲノム構造を解明

タグクラウド

AFM ATLAS ATP cholera toxin endocytosis endosome Higgs High energy LHC particle physics phosphatidylserine Wnt シンガナル イネ エネルギ エレクトロニクス エンドサイトーシス エンドソーム カイコガ カドミウム コレラ毒素 ナノモーター バイオ マテリアル ヒッグス フェロモン ブラックホール ホスファチルセリン 二種能性酵素 代謝系 医療

ここからアクセス！

Todai Research のバナー

東京大学のトップページ

コンテンツはこちらにも掲載されます

Feature Story を読んでみよう！

2012年2月15日に掲載された「今、そこにある過去（生産技術研究所・池内研究室）」をまるまる一本ご紹介します。最新の三次元デジタルデータ化技術が現代に蘇らせた失われた遺跡とは？次のページをご覧ください。

Research Highlights も読んでみよう！

天の川で特殊な星を発見した研究に、生活習慣病と肥満の意外な関係の話題、はたまた最新エレクトロニクスなどなど、東大の研究は本当に幅が広い！
特集の最後のページをご覧ください。

今、そこにある「過去」

三次元デジタルデータ化技術で挑むサイバー考古学

最新の三次元デジタルデータ化技術が、古代文明の謎を解き、失われた遺跡を現代によみがえらせました。生産技術研究所の池内研究室が挑戦するサイバーアーキオロジー（考古学）をご紹介します。

昔ながらの穏やかな風景が広がる奈良県明日香村。7世紀後半、この地には、最高の頭脳と技術が結集した政治・文化・流通の中心都市「飛鳥京」が置かれていました。しかし、現在は田畑が広がり、当手を偲ぼせるのは野山と建造物の遺構だけです。

2011年11月、この明日香村で「Mixed Reality（複合現実感）による飛鳥京体験ツアー」が開催されました。いにしへの最先端の都を、現代の最先端技術を使って蘇らせる試みです。この日、田園風景の中をゆっくり走る赤い電動バスに乗った参加者たちは、西暦645年のまさにこの場所を目にすることになりました。現在の村の風景に重ねて、飛鳥京に並ぶ木造家屋や色鮮やかな大伽藍をもつ飛鳥寺が現れます。参加者は蘇我氏暗殺事件まで目撃したのです。

飛鳥京体験ツアーを主催した、東京大学生産技術研究所の池内克史教授は、歴史的建造物のデジタルデータ化技術や復元展示技術を研究しています。文化財のデジタルデータは、保存・復元を助けるばかりでなく、考古学に新しい知見を加えることもあります。カンボジアのアンコール遺跡における「バイヨン寺院デジタルアーカイブ化プロジェクト」がその典型的な例です。

アンコール遺跡をスキャンする

アンコール王朝が最盛期を迎えた12世紀末に建造されたバイヨン寺院は、神々の顔を東西南北に刻んだ四面塔が林立する迫力のある外観と、回廊に施された繊細な浮き彫りで有名です。内戦などのために長い間無

管理状態にあり、倒壊の危機に瀕しています。

池内研究室は、日本国政府アンコール遺跡救済チームと協力してバイヨン寺院のデジタルデータ化に挑みました。屋外の巨大建造物の計測には様々な新技術が必要でした。

形の計測には、距離センサーを用います。通常、地上や足場に固定した距離センサーから対象物までの距離を一点ずつ計測することにより、点集合としての立体形状を得ます。

ところが、広さ160m×140m、高さ45mのバイヨン寺院には、従来の固定型センサーでは太刀打ちできません。そこで、気球にセンサーを吊り下げた「気球型移動距離センサー」を開発しました。しかし、気球が揺れるとセンサーと対象との距離が変化し、得られる立体画像に歪みが生じます。研究グループは、センサーの上に取り付けられたビデオ

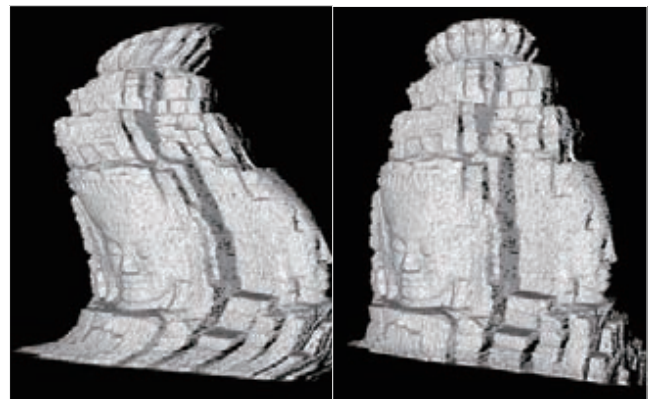


図1 気球型移動距離センサーで得られた画像(左)と、補正後の画像(右)



カメラの映像と比較する方法（阪野、2005年）や、地上据え置き型のセンサーと比較する方法（増田、2005年）により、距離データを補正して歪みの無い立体画像を得ました（図1）。

一方、増改築が繰り返された寺院内部には、狭くて複雑な空間が多く存在します。そのような場所も、梯子を上下しながら壁面を正面から計測する「木登りセンサー」（小野、2005年）や鏡を利用した手法を開発し、立体形状を計測することができました。

計測が終わると、取得データを張り合わせる「位置合わせ」を行います。ところが、バイヨン寺院のデジタルデータ量は膨大で、一台のコンピュータでは扱えません。大石岳史講師（現准教授）は、二枚の画像の高速位置合わせや複数のコンピュータを同時に使用する手法を考案して、従来の1000倍の計算速度を実現（大石、2005年）し、この問題も乗り越

えることができました。

形と同様に重要なのが、色の計測です。屋外の場合、時間や天候によって光の当たり方が変わるため、同じ材質でも色が異なって見えます。私たちは普段、光源からの光が物体表面で反射された色を見ています。色情報を取得するカラーカメラも同様に、光源の色と、物体に固有の反射率の掛け合わされたデータを記録します。しかし、文化財の保存という目的からは、光源の色に左右されない真の「色」である反射率の情報を記録する必要があります。そこで、太陽光の色を推定して日照による見かけの色変化をキャンセルし、寺院壁面の反射率を得る手法が考案されました（川上、2005年）。さらに、反射率の情報を利用して、さまざまな照明条件での見え方を合成できるようになりました（図2）。

見えないものを見るサイバー考古学

様々な技術開発を経て得られたバイヨン寺院のデジタルデータから、これまでわからなかった興味深い事実が見えてきました。

バイヨン寺院には多くのペディメント（切妻壁飾り）と呼ばれる彫刻があります。その大半は光の届かない狭隘部にあり、肉眼で見えることも写真撮影も不可能でした。池内研究室では、鏡を利用した距離センサーによって取得したペディメントの3次元データから合成画像を作成しました。この世界初の画像には、仏像が削り取られ、後からヒンズー教のシバ神の象徴であるリングが彫られた様子が写っていました（図3）。これは、バイヨン寺院が仏教寺院からヒンズー教寺院へと作り変えられたことを示す貴重な証拠となっています。

また、バイヨン寺院の大きな特徴である四面塔に関する分析も行われました。経年変化や苔などにより肉眼では形を判別しづらくなるほど変色した彫刻でも、コンピュータによる客観的な解析が可能です。その結



図2 カラーカメラによる画像（上）と補正後（下）

果、現存する 173 の顔面が、デーヴァ（男神）・デヴァター（女神）・アシュラ（悪魔）の三種類に分類できる事がわかりました。さらに、同じ塔の顔や位置的に近い顔が類似しているという結果が得られ、複数の職人グループで分担して制作が行われたという説が科学的に裏付けられました。

飛鳥京復元プロジェクト

池内研究室の活動は、計測・分析にとどまらず、デジタルデータを利活用する方法にも及びます。現在、クラウドコンピュータによるデータの共有や、遺跡の復元に関する研究が進行中です。

そのひとつが、現実世界に仮想物体を重ね合わせる複合現実感技術を利用した「飛鳥京復元プロジェクト」です。その実証実験として行われたのが、冒頭の飛鳥京体験ツアーでした。

ゴーグル型のヘッドマウントディスプレイ（HMD: Head Mounted Display）を装着した参加者たちが見ているのは、バスに取り付けられた全方位カメラが撮影するリアルタイムの映像です。装着した人の頭の動きに対応して、顔が向く方向の風景が映し出されます。その現実の風景に、コンピュータ・グラフィックス（CG）で復元された飛鳥京の建物が現れます。CGの建物が違和感なく現実世界に写るよう、光源環境に合わせてCGの見え方が変わる技術や、現実世界の人物の影がCGの実世界や建物に写る技術などが開発されました。

池内教授と大石准教授は、屋内のシアターではなく、現場での「体験」にこだわります。「昔ここに何々寺があったと言われても、小学生は『ふー

ん』と言うだけ。家に帰ると全て忘れてしまいます」（池内教授）。自分が立っている土地の歴史的意味を、疑似体験を通して理解する。それが、飛鳥京復元プロジェクトです。

かけがえのない文化財を守る工学者の夢

「世の中の役に立つことが、工学者の喜び」と語る池内教授は、研究室の技術によってかけがえのない文化を守ることを目指しています。より多くの人へ感動を届けるため、池内研究室の卒業生である角田氏は池内教授や大石准教授と共に、大学発のベンチャー企業「アスカラボ」を立ち上げました。「実用化して初めて気付く課題を研究室に持ち帰り、再び社会に還元するという、企業と研究室の密なループの実現が、現場の必要にもとづく研究を生む」と池内教授は語ります。社会と大学を結ぶ、始まったばかりの取り組みです。

人々が育む文化は、常に技術の進歩に根ざしてきました。新技術によってもたらされる感動は、かけがえのない文化を守り育ててゆく、大きな原動力になるはずです。

参考文献

「3次元デジタルアーカイブ」池内克史・大石岳史 財団法人東大出版会



図3 本来のペディメント（上）と仏像が削られたペディメント（下）



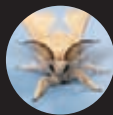
飛鳥京体験ツアーの電動バスと池内克史教授

今までの Feature Stories

生涯型人工股関節が医療現場へ
キャンパス内異分野連携が実るまで
医学系研究科、工学系研究科

いつかあなたに逢うために
解けた 2000 年の謎——ウナギの産卵地点を発見
大気海洋研究所

ヒッグス粒子「発見」へのカウントダウン
アトラス実験チームが目指す存在確率 99.9999%
理学系研究科 素粒子物理国際研究センター



2012年2月21日掲載分

繰り返し運動の習得に「よく見る」ことは逆効果

周期運動の誤差情報を処理する脳内メカニズムが明らかに



投球などの断続的な運動をするとき、脳は、実際の運動と目標の運動とのずれ（誤差）にもとづいて次の運動指令を修正し、学習を促進することがわかっています。

一方、バスケットボールのドリブルなどのリズムカルな周期運動における脳内メカニズムはよくわかっていませんでした。脳が連続的に誤差情報を受け取り続ける周期運動の場合も、断続的な運動と同様に、脳の運動指令修正機構はうまく働くのでしょうか。

東京大学大学院教育学研究科の野崎大地教授らは、周期運動では過剰な視覚的情報が学習を阻害することを発見し、時々目を閉じるなどして情報を遮断する方が学習に効果的であるという、直感に反する結果を示しました。

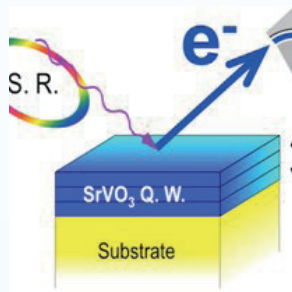
今回行ったハンドルの周期的に動かす実験では、一回目の運動サイクルで脳が受け取った誤差情報が、次のサイクルの運動修正を促すだけでなく、それ以降のサイクルの運動修正にむしろ悪影響を与えてしまい、学習が上手くいきませんでした。一方、このような悪影響を断ち切るため、4~5サイクルに一回だけ視覚的情報を与えると学習成績があがりました。この結果は、連続的に入力される情報は脳内で上手く処理されないことを示唆しています。

周期運動は、歩行や楽器演奏など、日常的・文化的活動に直接結びつく運動です。本研究の成果は、スポーツ練習方法だけでなく、リハビリテーション手法などにも実践的な示唆を与えると期待されます。

論文情報

Tsuyoshi Ikegami, Masaya Hirashima, Rieko Osu, and Daichi Nozaki, "Intermittent Visual Feedback Can Boost Motor Learning of Rhythmic Movements: Evidence for Error Feedback Beyond Cycles", *The Journal of Neuroscience*, 11 January 2012, 32(2):653-657; doi:10.1523/JNEUROSCI.4230-11.2012
<http://www.jneurosci.org/content/32/2/653.abstract>

今までの Highlightsから



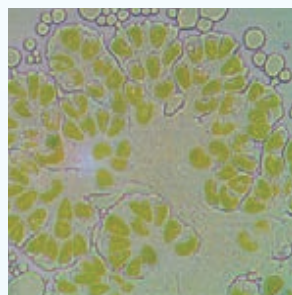
きままな天才児を手なずける

世界で初めて強相関電子を2次元空間に閉じ込めることに成功

2011年10月21日

工学系研究科

組頭広志



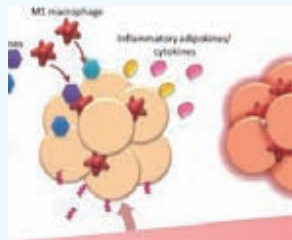
ボツリオコッカスは石油に代わるか

エネルギー問題の鍵を握る微細藻類の炭化水素合成酵素を同定

2011年10月28日

農学生命科学研究科

岡田茂



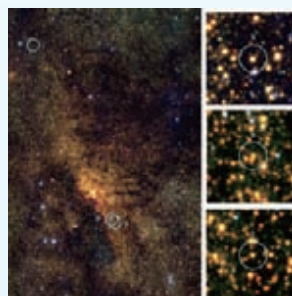
肥満になっても、いいの？

生活習慣病発症のメカニズムが初めて明らかに

2011年11月9日

医学系研究科

宮崎徹



セファイド変光星、宇宙を語る

初めて明かされた銀河系の歴史と、更なる謎

2011年11月11日

理学系研究科（木曾観測所）

松永典之

Todai Research のページには、ここではご紹介できなかった研究がたくさん掲載されています。本サイトが東大の研究を概観する助けになると共に、より広く詳しい情報を探し出す最初の一步として機能して欲しい、というのが編集部のお楽しみです。
 Todai Research をよろしくお祈いします！

Todai Research についてのご意見・お問い合わせはこちらまで
 メール: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線: 21045
 参照: 東大ポータル > 便利帳 > 総合企画部 > 広報課

NEWS

一般ニュース

本部評価・分析課

平成24年度 専攻の設置等について

一般

薬学系研究科薬科学専攻の課程変更、薬学専攻の設置

1. 設置の趣旨・必要性

本学薬学部は、平成18年4月に、学校教育法・薬剤師法の改正により、従来の4年制の「薬学科」を廃止して、4年制の「薬科学科」及び6年制の「薬学科」の2学科を設置した。薬学系研究科博士前期（修士）課程は、平成22年度に、従来の「分子薬学専攻」、「機能薬学専攻」、「生命薬学専攻」、「統合薬学専攻」の4専攻を廃止し「薬科学専攻」を設置した。このような改組の流れを踏まえつつ、我が国のアカデミア・創薬産業の育成や高度医療・医薬行政の推進を図るため、既存の博士後期課程の4専攻を廃止し、平成24年4月に「薬科学専攻」を修士課程から博士課程に課程変更するとともに、6年制の「薬学科」に基礎を置く4年制博士課程の「薬学専攻」を新設することとした。

具体的には、「薬科学専攻」は、有機化学、物理化学、生物化学を機軸に最高水準の教育・研究活動を行い、化学系薬学、物理系薬学、生物系薬学など薬学がカバーすべき広範な分野をリードする優れた創薬科学研究者、基礎生命科学研究者を養成することを目的としている。また、「薬学専攻」は、医療薬学、社会薬学、創薬学を機軸に最高水準の教育・研究活動を行い、高度化医療、医薬行政、創薬などの職域で実践的な研究能力を有する優れた先導的薬剤師、医薬行政従事者、創薬開発・研究従事者を養成することを目的としている。

2. 教育課程編成の考え方

<薬科学専攻>（博士後期課程）

「薬科学専攻」博士後期課程では、授業科目「薬科学特別研究Ⅱ」（研究指導）を配置し、これを通じて、化学系薬学、物理系薬学、生物系薬学などの分野で、さらに専門性を深め、新しい概念の創出や法則の発見等を可能とするための薬学的な思考法、論理的で先端的な方法論や分析能力を習得させる。

<薬学専攻>

「薬学専攻」では、「共通科目」及び「特別研究・実践研究」の科目で構成される。「共通科目」及び「実践研究」を通じて、医療系薬学、社会系薬学、創薬系薬学などの分野で、薬学の基礎を深め、生命科学全般に関わる横断的・統合的な方法論や、高度化医療、医薬行政、創薬に向けて社会のニーズに応え得る実践的な方法論を習得させつつ、「薬学特別研究」を通じて、薬学的な思考法、論理的で先端的な方法論や分析能力を習得させる。

3. 学位

薬科学専攻（博士後期課程：3年制）：博士（薬科学）

薬学専攻（博士課程：4年制）：博士（薬学）

4. 入学定員

薬科学専攻：50人

薬学専攻：10人

環境安全本部／本部労務・勤務環境課

東京大学メンタルヘルスセミナーを開催

一般

毎年、環境安全本部産業医は本部労務・勤務環境課及び医学系研究科健康科学・看護学専攻精神保健学研究室の協力のもと、全教職員を対象に、ストレス耐性を高めることを目的としたメンタルヘルスセミナーを実施している。

本年度は昨年11月から12月にかけて、東京大学メンタルヘルスセミナー“ストレスに強い「私」をつくる2つのワークショップ”を本郷・駒場・柏の3キャンパスで計8回開催した。参加者はのべ170人で、内訳は教員が22.4%、職員が77.6%と、多様な立場の方々に参加した。

本学の職場内を舞台とした仮想事例を題材に、自ら考え、手を動かし、参加者同士が共有することでストレスに強くなるコツへの理解を深めた。

受講者の91%が「参加してよかった」と回答し、「東大にありがちな事例でわかりやすかった（職員）」「シリーズ化するとよいのではないかと（教員）」等のご意見をいただいている。

来年度も同様の研修内容で開催を計画しています。まだ、受講されていない教職員の皆様、来年度のセミナーにぜひご参加ください。

また、出前講義は随時受付を行っています。一定人数（目安として6名程度以上）が集まれるようであれば受講者の方の希望に合わせて日程調整可能ですので、ご活用ください。

出前講義についての詳細は：

- 東大ポータル
- 環境安全本部
- 産業医・産業保健
- メンタルヘルスセミナー（バナー）



【セミナー風景】熱心にグループワークに取り組む参加者

【問い合わせ】

- ・本部労務勤務環境課（内）22062、22068
- ・産業衛生室（内）28429

高齢社会総合研究機構

柏市豊四季台団地へ野田総理が視察

一般

高齢社会総合研究機構が柏市・UR都市再生機構（以下UR）と協定を結んで長寿社会のまちづくりモデルの構築を社会実験として進めている柏市豊四季台団地へ、2月11日（土）に野田佳彦総理大臣が視察を行った。これは、当機構が提案しているエイジング・イン・プレイス（住み慣れた地域で自分らしく安心して生活ができる）の理念の中の一つである「地域包括ケアシステム」について、官邸より市へ視察の依頼がきたもので、当機構から秋山弘子特任教授、辻哲夫特任教授がプレゼンテーションならびに意見交換会に参加した。



総理を出迎え案内する秋山浩保柏市長、秋山弘子特任教授ら
（写真提供：内閣広報室）

秋山浩保市長、金江清市医師会長、吉村弘之UR部長の挨拶に続いて、秋山特任教授が、介護予防のための高齢期の自立維持政策として取り組んでいる生きがい就労をはじめ、本学の活動について紹介をした。その後、住民代表やサービス提供者側からの意見が述べられ、それらについての総理からの質問と回答など、約1時間にわたって非常に有意義な意見交換がなされた。



意見交換会の風景

野田総理からは、「豊四季台モデルとして、ぜひ力を結集して、取り組んでいただきたい。日本は課題先進国。日本のモデルだけでなく、世界のモデルとして、地域包括ケアシステムの発信をしてほしい。キーワードは『連携』であると強く認識した」とコメントがあり、また同行した長浜博行副官房長官は、「総理と海外を回ると、諸外国の関心は、何よりも日本政府の高齢化への対応にあると感じる。高齢化については日本が最先端であり、先例はない。東大が関与しているようなので、高齢化に対しアカデミアがいかに役割を果たし得るのかという点も注視している」とコメントされた。

当機構の前身のジェロントロジー寄附研究部門時代に柏市へコンセプト提案してから丸三年、エイジング・イン・プレイスの概念が、国のトップが視察に来るくらいまで展開がなされたことに感慨深く思うと同時に、完成形までしっかり実現し、さらに他への展開をきちんと進

めていかねばならないと責任を感じた今回の視察であった。



総理と共に記念撮影



情報システム本部

情報セキュリティセミナー開催される！

今年も昨年に引き続き、学内の情報システム担当者、情報セキュリティ担当者を対象とした情報セキュリティセミナーが2月14日（火）小柴ホールにて開催された。

今年も、本学から数理科学研究科の一井信吾准教授、学外から（株）三菱総合研究所情報通信政策研究本部副本部長村瀬一郎氏、原後綜合法律事務所の弁護士杉山真一氏の3名の方々が講演された。

一井准教授からは「情報セキュリティと情報倫理に関する最近の情勢から」と題し、最近の情報セキュリティと情報倫理関係の案件から注意したい事例や今後の留意点についての紹介とそれぞれの現場の情報セキュリティ力を高めてほしい旨のお願いがあった。



講演される数理科学研究科の一井准教授

村瀬氏からは、「最近の情報セキュリティ脅威の動向と対策」と題し、具体的サイバー攻撃の手法（見えない化、経済事件化、多様化、標的化等）や大規模サイバー攻撃

の事例、これら事例において対策を検討する上でのポイント、並びに組織における対策ポイント（事故が発生することを前提とした対策等）についての紹介があった。



講演される三菱総合研究所の村瀬副本部長

杉山氏からは、「法的視点からの情報セキュリティ（対策と参考事案）」と題し、行政機関・独立行政法人の個人情報漏えい状況、自治体・民間企業での個人情報漏えい事案、私立大学が警察に講演会参加者名簿を開示した行為がプライバシー侵害であると認定された事案など様々な具体的損害賠償請求事案についての紹介があった。



講演される原後綜合法律事務所の杉山弁護士

最後に若井祐次情報システム部長から、講演者の方々に対し感謝の言葉が述べられ、また参加された情報システム担当者、情報セキュリティ担当者の方々に対しては、本講演で得られた情報を持ち帰り、自部署の学生や教職員の人達にご指導いただきたい旨のお願いがあり、閉会となった。



国際本部

日本語教育センター2011年度冬学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式が行われる

日本語教育センターの2011年度冬学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式(修了証書授与式)が、2月16日(木)15時30分から医学部総合中央館(医学図書館)3階333会議室で行われた。

センターでは種々の日本語コースを開講しているが、このうち「集中日本語コース」は、初級から中上級までの留学生が1学期間集中的に日本語を学ぶコース、「学術日本語コース」は日本語で論文を書くための日本語スキルを身につけるコースで、この両コースについては修了式を行っている。「集中日本語コース」は4クラス、「学術日本語コース」は2クラスを10月に開講し、両コースあわせて43名の受講者が所定の課程を修了した。



集合写真

式には、修了者のほか、来賓として修了者の指導教員である栗栖(長谷川)聖先生(工)、及びセンター関係教職員が出席した。菊地康人日本語教育センター長から、修了者一人ひとりに修了証書が手渡され、あわせて、学生の日本語の上達と、そのための真剣な取り組み、各クラスの良い雰囲気などを評価する講評が述べられた。続いて、修了者を代表して、サマンティカさん(スリランカ、農、集中日本語コース・クラス1)、アハサヌルさん(バングラデシュ、薬、同コース・クラス2)、ミン・ボランさん(韓国、農、学術日本語コースA)の3名から日本語によるスピーチがあり、約4か月間の日本語のすばらしい上達ぶりが披露された。

式終了後、引き続き山上会館で懇談会が行われた。田中明彦副学長から修了者に向けて、外国語学習の意義に触れながら、今後とも日本語学習を続けるように励ますスピーチが日本語で行われ、修了者は熱心に耳を傾けていた。さらに、修了者のオレリアンさん(フランス、新領域、集中日本語コース・クラス3)、ミジェルさん(フィリピン、情報学環、同コース・クラス4)の2人からのそれぞれの思いをこめたスピーチや、教員を囲んでの写

真撮影など、くつろいだ雰囲気のうちに会は進行し、終了時間が来ても修了者たちが名残を惜しんでなかなか立ち去らない、印象深いパーティーとなった。

なお、今期の修了者43名の所属・出身は、以下のとおり、11研究科等、18の国または地域である。

■研究科等(11研究科等)

法学政治学研究科	2名
総合文化研究科	1名
工学系研究科	21名
農学生命科学研究科	4名
医学系研究科	2名
薬学系研究科	1名
数理科学研究科	2名
新領域創成科学研究科	2名
情報理工学系研究科	3名
学際情報学府	4名
公共政策学教育部	1名

■国または地域(18カ国・地域)

・アメリカ	1名	・中国	17名
・イスラエル	1名	・ドイツ	2名
・イラン	1名	・ニュージーランド	1名
・オーストラリア	1名	・ネパール	1名
・韓国	4名	・バングラデシュ	1名
・シンガポール	1名	・フィリピン	1名
・スペイン	1名	・ブラジル	1名
・スリランカ	1名	・フランス	4名
・タイ	3名	・マレーシア	1名



修了証の授与



修了者代表のスピーチ



産学連携本部

技術の融合によるイノベーション創造を求めて
—第2回「国際産学連携フォーラム」を開催—

イノベーション創造において国際的な視点が欠かせない昨今、海外企業と東京大学の相互の情報発信を組み合わせた新しい形の産学連携活動として、「Technology Synthesis」をテーマとした第2回国際産学連携フォーラム (2nd Global UCR Forum) を2月21日 (火)、山上会館で開催した。第2回目今回は、米国ボーイング社の技術担当副社長 Matthew Ganz 氏とプロダクト開発ディレクター Ray Grove 氏にシアトルより来学いただき、本学教員・研究者・学生約80名に対して、同社が目指す研究開発の方向性や本学への期待についてご講演をいただいた。

まず、松本洋一郎理事・副学長が、「海外著名企業から発信されるメッセージを真摯に受け取り、新たな研究活動の指針としていただきたい。特に次代を担う若手研究者の皆さんには、産業界が何を考え、何を求めているのかに触れ、研究活動の幅をぜひ広げてほしい」と挨拶し、ひきつづき、本学が世界の人々に積極的に貢献することで、日本に対する信頼と敬意が高まることを期待しているという趣旨を表明した。

続くボーイング社の Ganz 副社長の講演では、冒頭、松本理事・副学長の挨拶に応える形で、“Partnering with the Best” (ベストとの連携) との言及があり、ボーイング社が本学をベストのひとつとして位置付けていることが強調された。「航空宇宙技術の方向性—変化する環境下での航空宇宙イノベーション」と題する講演の中で、同社が挑んでいる最大の課題として、環境保護に関する対策とその対応技術テーマを列挙し、本学とのパートナーシップがその解決に役立つものになることへの期待が示された。

Grove 氏は、「航空と環境—進化するテクノロジーとイノベーション」の講演の中で、同社製品における環境

に配慮した取り組み—新しい飛行機を作る時に飛行を良好にするためのプログラム、低燃費を目指す改良などの具体的な取り組み—を順次紹介した。また同社社長である W.J.McNerney 氏から本学に寄せられた「イノベーションを図ると同時に、天然資源の保護にも重点的に取り組もう」というメッセージを示し、より良い未来へ向けた、本学とボーイング社との協力関係を呼びかけた。

その後、工学系研究科航空宇宙工学専攻の鈴木真二教授が、本学における最新の研究事例を紹介し、講演を終了した。引き続き行った個別セッションでは、鈴木教授がモデレーターとなり、ボーイングに紹介できる環境技術を研究している各教員が、航空宇宙工学に関する自らの研究事例を具体的に紹介し、ボーイング社との間でより踏み込んだ提案、ディスカッションを展開した。ボーイング社側からは、それぞれの技術に対する適用可能性や研究スケジュールに関する質問、将来の連携に対しての前向きなメッセージなどが伝えられ、今後における産学連携への大きな一歩が踏み出せた。

フォーラム後に行われた懇談会では、多くの留学生、外国人研究者も参加し、随所で熱気あふれるディスカッションが続き、名残りを惜しんでの散会となった。



左から松本理事・副学長、Ganz 氏、Grove 氏、保立産学連携本部長、鈴木教授



講演する米国ボーイング社副社長 Ganz 氏



学生の質問に応える、米国ボーイング社
プロダクツ開発ディレクター Grove 氏

本部留学生・外国人研究者支援課

一般
本学卒業・修了予定の外国人留学生、
留学生支援団体等と総長との懇談会

2月29日（水）18時から、東天紅上野店において「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会」が開催された。

この会は、本学の学部を卒業または大学院修士課程・博士課程を修了する予定の外国人留学生、留学生支援団体等の関係者及び総長ほか役員をはじめとする本学教職員が一堂に会して親睦を深めることを目的としており、会には留学生約190名に加え、日頃より留学生をサポートしていただいている支援団体、各国大使館及び行政機関等の関係者、並びに本学教職員の総勢約370名の参加者があった。

会は濱田純一総長の挨拶に引き続き、留学生支援団体の代表として財団法人KDDI財団理事長 伊藤泰彦氏からご挨拶をいただき、田中明彦国際本部長（副学長）による乾杯の発声で幕を開けた。



来賓スピーチをいただいた（財）KDDI財団
理事長 伊藤泰彦氏

しばらくの歓談ののち、ミャンマー留学生会及び在日

インドネシア留学生協会東京大学支部による舞踊・伝統楽器演奏の披露があった。その後、本年3月に文学部卒業予定のマクラフリン キリ ユミさん、大学院工学系研究科修士課程修了予定のワッタナウェキン ティーラボンさん、大学院医学系研究科博士課程修了予定のジュジェヨルさんの3名から、日本での経験や思い出、研究生生活や卒業・修了後の抱負などに関するスピーチがあった。

会場では留学生が、総長をはじめ本学役員や研究科長、留学生支援団体等からの出席者とともに記念写真を撮る姿などが見られ、終始和やかな雰囲気にも包まれた。会の終盤近くでは、東京大学運動会応援部と参会者一同による東京大学応援歌「ただ一つ」の合唱、応援部によるエールののち、予定時間の20時、江川雅子理事から閉会の挨拶があり、会は盛会のうちに終了した。



スピーチを行った留学生と濱田総長
（左から）マクラフリン キリ ユミさん、ワッタナウェキン
ティーラボンさん、濱田総長、ジュジェヨルさん

本部入試課
**平成24年度外国学校卒業学生特別
 選考の第1次選考合格者が決まる**

平成24年度外国学校卒業学生特別選考の願書受付は、第1種が12月1日（木）～12月8日（木）、第2種が11月1日（火）～11月9日（水）に行われた。

志願者数は、第1種（私費外国人留学生）93人、第2種（帰国生）101人、合計194人で前年度より50人減少した。

また、第1次選考の書類審査が行われ、1月20日（金）に第1種32人、第2種50人、合計82人が合格し、各人あてに結果が通知された。第2次選考の小論文と学力試験は2月25日（土）・26日（日）、面接試験は、3月17日（土）に、合格者発表は3月21日（水）に行われる。

外国学校卒業学生特別選考第1次選考結果				
科 類	第1種（私費外国人留学生）		第2種（帰国生）	
	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
文科一類	6	2	25	14
文科二類	37	9	22	13
文科三類	11	5	19	9
理科一類	28	11	23	5
理科二類	8	5	4	4
理科三類	3	0	8	5
合 計	93	32	101	50

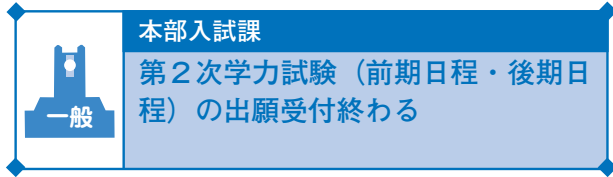
なお、志願者の種別人数、国籍等（第1種）及び修学先の所在国名等（第2種）の内訳は、次のとおりである。

【第1種】

インドネシア	2人
韓 国	30人
台 湾	3人
中 国	53人
ベトナム	2人
フィンランド	1人
ベルギー	1人
ロシア	1人
<hr/>	
合 計	93人

【第2種】

韓 国	3人
シンガポール	2人
タ イ	1人
台 湾	2人
中 国	14人
中 国（香港）	1人
フィリピン	1人
ベトナム	1人
マレーシア	2人
エジプト	1人
オーストラリア	4人
ニュージーランド	2人
メキシコ	1人
アメリカ	45人
カナダ	3人
イギリス	3人
イタリア	2人
スイス	1人
ドイツ	5人
フランス	5人
ベルギー	1人
南アフリカ	1人
<hr/>	
合 計	101人




平成24年度第2次学力試験の願書受付が1月23日（月）から2月1日（水）の間、行われた。
志願者数は次のとおりである。

前期日程入学志願者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	前年度の倍率
文科一類	401	1,592	3.97	3.88
文科二類	353	1,078	3.05	3.38
文科三類	469	1,439	3.07	3.15
理科一類	1,108	3,126	2.82	2.64
理科二類	532	2,252	4.23	3.86
理科三類	100	504	5.04	5.65
合 計	2,963	9,991	3.37	3.30

後期日程入学志願者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	前年度の倍率
文科一類	100	3,224	32.24	29.67
文科二類				
文科三類				
理科一類				
理科二類				
理科三類				
合 計	100	3,224	32.24	29.67



本部入試課

平成24年度第2次学力試験（前期日程）第1段階選抜合格者が決まる

本学の平成24年度第2次学力試験（前期日程）の第1段階選抜が行われ、2月8日（水）午後、本郷地区キャンパス内において合格者が発表された。

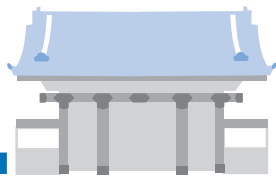
これにより、2月25日（土）・26日（日）に、本郷・駒場の両キャンパス試験場において行われる前期日程試験の受験者数が確定した。各科類の第1段階選抜合格者数は下表のとおりである。

前期日程試験第1段階選抜結果

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜		合格者科類別成績		
				合格者	予告倍率	最高点	最低点	平均点
文科一類	401	1,592	3.97	1,220	3.0	889	721	786.40
文科二類	353	1,078	3.05	1,059	3.0	887	670	796.21
文科三類	469	1,439	3.07	1,407	3.0	868	632	792.14
理科一類	1,108	3,126	2.82	2,770	2.5	885	770	813.82
理科二類	532	2,252	4.23	1,871	3.5	881	743	792.72
理科三類	100	504	5.04	400	4.0	889	706	812.92
合 計	2,963	9,991	3.37	8,727				

※大学入試センター試験成績は、900点を満点とする。

部局 ニュース



退職教員の紹介

部局

大学院法学系研究科・法学部

北岡 伸一 教授

(本学在職期間：平成9年10月～平成24年3月
途中 平成16年4月～18年9月 休職)



昭和46年6月
本学法学部卒業
昭和51年9月
本学大学院法学政治学研究科博士課程修了
昭和51年10月
立教大学法学部専任講師
昭和53年10月
立教大学法学部助教授

昭和60年10月 立教大学法学部教授
平成9年10月 本学大学院法学政治学研究科教授
平成16年4月
特命全権大使（日本国政府国連代表部次席代表）
平成18年9月 本学大学院法学政治学研究科教授
専門分野：日本政治外交史
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・北岡伸一『日本陸軍と大陸政策 1906～18年』東京大学出版会, 1978年.
・Kitaoka, Shinichi. "China Experts in the Army," in Duus, Peter, Ramon Myers, and Mark R. Peattie, eds., *Japan's Informal Empire in China, 1895-1937*, Princeton University Press, 1989.

馬場 康雄 教授

(本学在職期間：昭和49年4月～平成24年3月)

昭和46年6月 本学法学部卒業
昭和48年3月

本学大学院法学政治学研究科修士課程修了
昭和49年4月 本学社会科学研究所助手
昭和55年1月 本学社会科学研究所助教授
昭和60年7月 本学法学部助教授
昭和63年6月 本学法学部教授
専門分野：ヨーロッパ政治史
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・馬場康雄他（編）『イタリアの政治』早稲田大学出版部,

1999年.

・馬場康雄「イタリア議会政治における普通選挙権問題」『国家学会 雑誌』101巻, 5・6号(1988年)

森田 朗 教授

(本学在職期間：1994年4月～2012年3月)



1976年3月
本学法学部卒業
1976年4月
本学法学部助手
1981年4月
千葉大学法経学部助教授
1993年10月
千葉大学法経学部教授

1994年4月
本学大学院法学政治学研究科教授
2004年4月
本学公共政策大学院（大学院公共政策学連携研究部・教育部）教授
2004年～2008年3月
本学公共政策大学院院長（連携研究部・教育部部長）
2005年～2009年3月 総長特任補佐
2008年7月～2010年7月
本学政策ビジョン研究センター長
2010年4月
本学大学院法学政治学研究科教授・公共政策大学院教授併任
2010年8月 本学政策ビジョン研究センター学術顧問
専門分野：行政学 公共政策
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・森田朗『制度設計の行政学』慈学社出版, 2007年.

大学院医学系研究科・医学部

岡山 博人 教授

(本学在職期間：平成4年4月～平成24年3月)



昭和48年3月
熊本大学医学部医学科卒業
昭和52年3月
京都大学大学院生理系専攻
博士課程修了
昭和53年9月
Postdoctoral Fellow（スタンフォード大学メディカルスクール）

昭和58年2月
Visiting Scientist（アメリカ国立衛生研究所）
昭和63年4月 大阪大学微生物病研究所教授
平成3年10月
新技術事業団・岡山細胞変換プロジェクト総括責任者

平成4年4月 本学医学部教授
 平成9年4月 本学大学院医学系研究科教授
 所属：分子細胞生物学専攻 生化学・分子生物学講座分子生物学分野
 専門分野：遺伝子工学、細胞周期、発がん機構
 研究内容（代表的な著書・論文等）：
 ・Hiroto Okayama, and Paul Berg. "High efficiency cloning of full length cDNA." *Molecular and Cellular Biology* 2, (1982): 161-170.

甲斐 一郎 教授

(本学在職期間：平成4年4月～平成24年3月)



昭和52年3月
 本学医学部医学科卒業
 昭和63年9月
 医学博士（東京大学）
 平成元年6月
 Master of Public Health
 (ハーバード大学)

平成4年4月 本学大学院医学系研究科助教授
 平成9年4月 本学大学院医学系研究科教授
 所属：公共健康医学専攻 行動社会医学 老年社会科学分野
 専門分野：社会老年学、終末期医療、医療倫理学、国際保健学
 研究内容（代表的な著書・論文等）：
 ・Kai I, Ohi G, Yano E, Kobayashi Y, Miyama T, Niino N, Naka K. "Communication between patients and physicians about terminal care: A survey in Japan." *Social Science & Medicine* 36 (1993): 1151-1159.

郭 伸 准教授

(本学在職期間：昭和58年7月～昭和62年6月、昭和63年6月～平成元年3月、平成4年10月～平成24年3月)



昭和52年3月
 本学医学部医学科卒業
 昭和59年4月
 本学医学部助手
 平成元年4月
 国立精神・神経センター神経研究所室長
 平成6年6月
 本学医学部講師

平成9年10月 本学医学系研究科助教授
 所属：脳神経医学専攻 臨床神経精神医学講座 神経内科学分野
 専門分野：神経内科学、分子神経病態学
 研究内容（代表的な著書・論文等）：
 ・Kawahara Yukio, Ito Kyoko, Sun Hui, Aizawa Hitoshi,

Kanazawa Ichiro, Kwak Shin: "RNA editing and death of motor neurons." *Nature* 427, no. 6977 (2004): 801.
 ・Kwak Shin, Hideyama Takuto, Yamashita Takenari: AMPA receptor-mediated neuronal death in motor neuron diseases. In: *Amino Acid Receptor Research*, Eds. Paley BF, Warfield TE, New York, Nova Science Publishers Inc. 2008. pp 293-310.

菅田 勝也 教授

(本学在職期間：昭和56年4月～平成3年1月、平成4年4月～平成24年3月)



昭和50年3月
 本学医学部保健学科卒業
 昭和60年9月
 保健学博士（東京大学）
 平成6年10月
 本学医学部助教授
 平成14年8月
 本学大学院医学系研究科教授

平成18年4月～平成20年3月
 本学医学部健康科学・看護学科長
 所属：健康科学・看護学専攻 予防看護学講座 看護管理学分野
 専門分野：看護管理学、基礎看護学
 研究内容（代表的な著書・論文等）：
 ・菅田勝也編著『看護管理に活かすベンチマーキング－看護サービスの質改善のために』中山書店、2012年。
 ・Katsuya Kanda and Mathy Mezey. "Registered nurse staffing in Pennsylvania nursing homes: Comparison before and after implementation of Medicare's Prospective Payment System." *Gerontologist* 31,3(1991): 318-324.

竹中 克 講師

(本学在職期間：昭和51年6月～昭和53年5月、昭和54年6月～平成58年7月、昭和61年4月～平成24年3月)



昭和51年3月
 本学医学部医学科卒業
 平成4年12月
 本学医学部講師
 所属：検査部
 専門分野：超音波医学（循環器領域）

研究内容（代表的な著書・論文等）：
 ・大木崇、竹中克編著『拡張期学』文光堂、2011年。
 ・Takenaka K, Waffarn F, Dabestani A, Gardin JM, Henry WL. "A pulsed Doppler echocardiographic

study of the postnatal changes in pulmonary artery and ascending aortic flow in normal term newborn infants." *Am Heart J* 113, (1987): 759-766.

三品 昌美 教授

(本学在職期間：平成5年12月～平成24年3月)



昭和46年3月
京都大学工学部工業化学科
卒業
昭和52年3月
工学博士(京都大学)
昭和56年7月
京都大学医学部助教授
平成2年3月
新潟大学脳研究所教授
平成5年12月
本学医学部教授

平成9年4月 本学大学院医学系研究科教授

平成21年4月～平成23年3月

本学大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター
センター長

所属：機能生物学専攻 薬理学講座 分子神経生物学分
野

専門分野：分子脳科学、薬理学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・Uemura, T., Lee, S., Yasumura, M., Takeuchi, T.,
Yoshida, T., Ra, M., Taguchi, R., Sakimura, K. and
Mishina, M. "Trans-synaptic interaction of GluR δ 2
and neurexin through Cbln1 mediates synapse
formation in the cerebellum." *Cell* 141 (2010): 1068-1079.

村嶋 幸代 教授

(本学在職期間：平成5年5月～平成24年3月)



昭和50年3月
本学医学部保健学科卒業
昭和52年3月
本学大学院医学系研究科保
健学専攻修士課程修了
昭和52年4月
神奈川県立衛生短期大学
助手

昭和60年3月 保健学博士(東京大学)

昭和61年4月 聖路加看護大学講師

平成元年4月 聖路加看護大学助教授

平成5年5月 本学医学部助教授

平成8年4月 本学大学院医学系研究科助教授

平成13年4月 本学大学院医学系研究科教授

平成15年4月～平成23年3月

本学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻長

平成19年4月～平成21年6月

本学男女共同参画室・室長

所属：健康科学・看護学専攻地域看護学分野 健康科
学・看護学専攻 母性看護学・助産学分野(兼任)

専門分野：地域看護学、公衆衛生看護学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・村嶋幸代, 鈴木るり子, 岡本玲子(編)『保健師による
全戸家庭訪問と東日本大震災からの復興 - 岩手県大槌
町での活動から見えてきたこと』明石書店, 2012年.

・Murashima S, Asahara K. "The Effectiveness of the
Around-the-Clock In-Home Care System: Did It
Prevent the Institutionalization of Frail Elderly?"
Public Health Nursing 20, 1(2003): 13-24.

大学院工学系研究科・工学部

新井 民夫 教授

(本学在職期間：昭和52年10月～平成24年3月)



昭和45年3月

本学工学部精密機械工学科
卒業

昭和47年3月

本学大学院工学系研究科修
士課程修了

昭和52年3月

本学大学院工学系研究科博
士課程修了、工学博士(東
京大学)

昭和52年10月 本学工学部講師

昭和54年1月 本学工学部助教授

昭和58年4月～昭和61年3月

本学工学部総合試験所助教授

昭和62年7月 本学工学部教授

平成12年4月～平成17年3月

本学人工物工学研究センター長

所属：精密工学専攻 精密情報システム工学講座

専門分野：生産システム工学、ロボット工学、サービス
工学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・新井民夫編：JISの使い方シリーズ・産業用ロボット
言語 "SLIM", 日本規格協会(1994).

・Tamio Arai, Y. Shimomura: Proposal of Service CAD
System - A Tool for Service Engineering -, *Annals of
CIRP*, Vol.53/1, pp. 397-400 (2004).

大久保 誠介 教授

(本学在職期間：昭和50年6月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部産業機械工学科
卒業
昭和50年3月
本学工学系研究科産業機械
工学専攻博士課程修了、工
学博士（東京大学）
昭和50年6月
本学工学部資源開発工学科
講師

昭和51年8月～昭和53年7月

米国西バージニア大学 Research associate

昭和53年10月 本学工学部助教授

平成4年10月 本学工学部教授

所属：システム創成学専攻

専門分野：岩石力学、掘削機械

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・大久保誠介「コンプライアンス可変型構成方程式の解析的検討」『資源・素材学会誌』第108号（1992年）：601-606.

・Seisuke Okubo, Katsunori Fukui, Yuichi Nishimatsu. "Estimating Abrasivity of Rock by Laboratory and In Situ Tests." *Rock Mech. Rock Eng.* 44, no. 2 (2010): 1-14.

笠木 伸英 教授

(本学在職期間：昭和51年4月～平成24年3月)



昭和46年6月
本学工学部卒業
昭和51年3月
本学大学院工学系研究科博
士課程修了、工学博士（東
京大学）
昭和51年4月
本学工学部専任講師
昭和52年4月
本学工学部助教授

昭和55年9月～56年10月

スタンフォード大学客員研究員

平成2年3月 本学工学部教授

平成4年4月 本学大学院工学系研究科教授

平成7年4月～8年3月 本学総長補佐

平成14年4月～16年3月

本学評議員、工学系研究科技術部長、国際交流室長

平成22年9月 ミュンヘン工科大学 特別招聘教授

所属：機械工学専攻 機械物理工学講座

専門分野：熱流体工学、エネルギーシステム工学、乱流工学、科学技術政策など

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・笠木伸英（総編集）『乱流工学ハンドブック』朝倉書店、2009年.

・Nobuhide Kasagi, Yasuoki Tomita, and Akiyoshi Kuroda, "Direct numerical simulation of passive scalar field in a turbulent channel flow," *ASME J. Heat Transfer*, Vol. 114, No. 3, 1992, pp. 598-606.

河内 啓二 教授

(本学在職期間：昭和56年8月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部航空学科卒業
昭和50年3月
本学工学系研究科博士課程
修了（工学博士）
昭和50年7月
科学技術庁航空宇宙技術研
究所研究員

昭和56年8月 本学工学部助教授

平成3年2月 本学工学部教授

所属：航空宇宙工学専攻

専門分野：飛行力学 ヘリコプタ工学 生物の運動学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・Keiji Kawachi et al. *Flow Phenomena in Nature*, Vols.1 and 2. Town. Southampton: WIT Press, 2006.

・Keiji Kawachi. "Extension of Local Momentum Theory to Hovering Rotor with Distorted Wake." *Journal of Aircraft*, 19, No.7(1982): 538-545.

久保 哲夫 教授

(本学在職期間：平成15年10月～平成24年3月)



昭和46年6月
本学工学部建築学科卒業
昭和48年3月
本学大学院工学系研究科
建築学専門課程修士課程
修了
昭和52年3月
本学大学院工学系研究科
建築学専門課程博士課程
修了

昭和52年4月 本学工学部助手

昭和54年4月 建設省建築研究所研究員・同主任研究員（第3研究部・国際地震工学部）

昭和58年8月 名古屋工業大学助教授（工学部）

平成5年4月 名古屋工業大学教授（工学部）

平成15年10月 本学大学院工学系研究科教授

所属：建築学専攻 建築構造学講座

専門分野：耐震構造、鉄筋コンクリート構造、強震地震動特性評価

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・梅村魁編著『鉄筋コンクリート建物の動的耐震設計

法・続(中層編)』技報堂出版、1982.

・Kubo, T., "Seismic Design of Reinforced Concrete NPP Structures in Japan -With Comparison with High-rise Reinforced Concrete Buildings-," Invited Lecture in *Proc. of Advances in Seismic Design of Structures, Systems and Components of Nuclear Facilities*, (November 2011) 96-122.

小林 郁太郎 教授

(本学在職期間：平成11年4月～平成24年3月)

昭和45年3月



本学工学部電子工学科卒業
昭和50年3月
本学大学院工学系研究科博士課程修了
昭和50年4月
日本電信電話公社横須賀電気通信研究所研究員

昭和54年11月

カナダ通信省 Communications Research Centre 交換研究員

昭和64年2月 日本電信電話(株) 人事部 第三部門長

平成4年2月 日本電信電話(株) 伝送システム研究所光加入者システム研究部長

平成11年4月 本学大学院工学系研究科教授

所属：精密工学専攻 人工学講座

専門分野：環境、情報、ネットワーク

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・小林郁太郎(編著)『光通信工学(1)、(2)』コロナ社、1998.

・小林郁太郎他『光ファイバの伝送特性と周波数掃引法による測定』Trans. IECE '77/4 Vol.60-C, No.4, pp.243-250

鈴木 俊夫 教授

(本学在職期間：昭和63年4月～平成24年3月)

昭和47年4月



本学工学部冶金学科卒業
昭和49年3月
本学大学院工学系研究科冶金学専門課程修士課程修了
昭和52年3月
本学大学院工学系研究科金属工学専門課程博士課程修了

昭和53年4月 長岡技術科学

大学工学部助手

昭和54年4月 長岡技術科学大学工学部講師

昭和55年4月 長岡技術科学大学工学部助教授

昭和63年4月 本学工学部助教授

平成6年6月 本学工学部教授

平成7年4月 本学大学院工学系研究科教授

所属：マテリアル工学専攻 環境システム講座

専門分野：凝固工学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・Seong Gyoon Kim, Won Tae Kim and Toshio Suzuki. "Phase-field Model for Binary Alloys." *Physical Review E* 60, No.6, (1999):7186-7197

土井 正男 教授

(本学在職期間：平成16年4月～平成24年3月)



昭和45年3月31日

本学工学部卒業

昭和48年3月29日

本学工学系研究科修士課程修了

昭和49年3月31日

本学工学系研究科博士課程退学

昭和49年4月1日

東京都立大学理学部物理学科助手

昭和53年10月1日

東京都立大学理学部物理学科助教授

平成元年8月1日 名古屋大学工学部応用物理学科教授

平成16年4月1日

本学工学系研究科物理工学専攻教授

所属：物理工学専攻 物理工学講座

専門分野：ソフトマター物理学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・土井正男『ソフトマター物理学入門』岩波書店、2010年.

・M.Doï and S.F. Edwards, *The theory of polymer dynamics*, Oxford University Press, 1986

前田 康二 教授

(本学在職期間：昭和51年4月～平成24年3月)



昭和45年3月

本学工学部物理工学科卒業

昭和51年3月

本学大学院工学系研究科物理工学専攻博士課程修了

平成元年4月

本学工学部物理工学科助教授

平成7年5月

本学大学院工学系研究科物理工学専攻教授

所属：物理工学専攻 物理実験学講座

専門分野：格子欠陥・ナノサイエンス

研究内容(代表的な著書・論文等)：

- ・前田康二、竹内伸『結晶欠陥の物理』裳華房, 2011年.
- ・K. Maeda et al. "Quantitative Measurements of Recombination Enhanced Dislocation Glide in Gallium Arsenide." *J. Appl. Phys.* 54, no.1 (1983): 161-168.

宮田 秀明 教授

(本学在職期間：昭和52年4月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部船舶工学科卒業
昭和47年3月
本学大学院工学系研究科
船舶工学修士課程修了
昭和52年4月
本学工学部船舶工学科助手
昭和53年10月
本学工学部船舶工学科講師

昭和54年7月

本学工学部船舶海洋工学科助教授

平成6年7月 本学工学部船舶海洋工学科教授

平成20年4月

本学大学院工学系研究科システム創成学専攻教授

所属：システム創成学専攻

専門分野：社会システム工学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・宮田秀明 『理系の経営学』日経BP社, 2003年.
- ・Hideaki Miyata. *Nonlinear Ship Waves*. Academic Press, 1984.

大学院人文社会系研究科・文学部

天野 正幸 教授

(本学在職期間：平成元年4月～平成24年3月)



昭和46年3月
本学文学部卒業
昭和48年3月
本学大学院人文科学研究科
修士課程修了
平成元年4月
本学文学部助教授
平成5年12月
本学文学部教授

所属：基礎文化研究専攻哲学講座

専門分野：ギリシャ哲学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・天野正幸『アイデアとエピステーメー —プラトン哲学の発展史的研究』東京大学出版会, 1998年.

小松 久男 教授

(本学在職期間：平成7年4月～平成24年3月)



昭和49年3月
東京教育大学文学部卒業
昭和55年3月
本学大学院人文科学研究科
博士課程中退
平成7年4月
本学大学院人文社会系研究
科助教授

平成8年4月 本学大学院人文社会系研究科教授

平成17年4月～19年3月

本学大学院人文社会系研究科副研究科長

平成21年4月～23年3月

本学大学院人文社会系研究科長

所属：アジア文化研究専攻東洋史学講座

専門分野：中央アジア史

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・小松久男『革命の中央アジア：あるジャディードの肖像』東京大学出版会, 1996年.
- ・Komatsu Hisao, "From Holy War to Autonomy: Dār al-Islām Imagined by Turkestani Muslim Intellectuals." *Cahiers d'Asie Centrale*, No.17/18 (2009): 449-475.

土田 龍太郎 教授

(本学在職期間：昭和58年4月～平成24年3月)



昭和46年6月
本学文学部卒業
昭和54年9月
本学大学院人文科学研究科
博士課程中退
昭和58年4月
本学文学部助教授
平成6年4月
本学文学部教授

平成7年4月 本学大学院人文社会系研究科教授

所属：アジア文化研究専攻インド語インド文学講座

専門分野：インド文学・インド哲学・仏教学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・Tsuchida Ryutaro. *Das sattra-Kapitel des Jaiminīya Brāhmaṇa*. Marburg: Mauersberger, 1979.

大学院理学系研究科・理学部

久保野 茂 教授

(本学在職期間：昭和54年10月～平成24年3月)



昭和45年3月
東北大学理学部卒業
昭和50年3月
本学大学院理学系研究科博士課程修了
昭和52年10月
ブルックヘブン国立研究所
研究員
昭和54年10月
本学原子核研究所助手

平成9年8月 本学大学院理学系研究科助教授
平成13年4月 本学大学院理学系研究科教授
所属：附属原子核科学研究センター 極限原子核構造分野

専門分野：原子核物理・宇宙核物理学

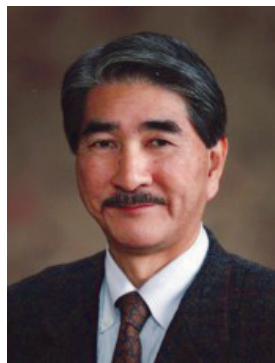
研究内容（代表的な著書・論文等）：

・久保野茂, 梶野敏貴 シリーズ現代の天文学第12巻天体物理の基礎『核反応・元素合成基礎論』（第2章）日本評論社, 2009.

・Akito Arima and Shigeru Kubono, *Treatise on Heavy-Ion Science vol. 1 - Cluster Transfer Reactions Induced by Heavy Ions*, Plenum Press (New York, 1984).

濱口 宏夫 教授

(本学在職期間：昭和50年4月～平成元年12月、平成7年4月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学理学部化学科卒業
昭和47年3月
本学大学院理学系研究科化学専攻修士課程修了
昭和50年3月
本学大学院理学系研究科化学専攻博士課程修了
昭和50年4月
本学理学部助手

昭和56年11月 本学理学部講師
昭和58年11月 本学理学部助教授
平成2年1月 神奈川科学技術アカデミー研究室長
平成7年4月 本学教養学部教授
平成9年4月 本学大学院理学系研究科教授
平成19年4月

台湾国立交通大学理学院講座教授（兼任）

所属：化学専攻 物理化学講座

専門分野：物理化学 分子分光学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・濱口宏夫、平川暁子編著『ラマン分光法』日本分光学会測定法シリーズ，学会出版センター，1988年。

・Hiro-o Hamaguchi, "Transient and Time-resolved Raman Spectroscopy of Short-lived Intermediate Species." *Vibrational Spectra and Structure*, 16, (1987): 227-309.

大学院農学生命科学研究科・農学部

青木 一郎 教授

(本学在職期間：1977年12月～2012年3月)



1970年3月
本学農学部農芸化学科卒業
1977年3月
本学大学院農学系研究科水産学専門課程博士課程修了
1989年3月
本学海洋研究所助教授

2000年6月

本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：水圏生物科学専攻 水圏生産環境科学講座 水産資源学分野

専門分野：水産資源学、水産海洋学、資源計測学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・青木一郎 共編著『漁業と資源の情報学』恒星社厚生閣, 1999年.

・Ichiro Aoki and T. Komatsu. "Analysis and prediction of the fluctuation of sardine abundance using a neural network." *Oceanologica Acta* 20, no.1 (1997): 81-88.

谷口 信和 教授

(本学在職期間：昭和58年4月～平成24年3月)



昭和47年4月
本学農学部農業経済学科卒業
昭和52年3月
本学大学院農学系研究科博士課程単位取得退学
昭和52年4月
名古屋大学経済学部助手

昭和57年5月 愛知学院大学商学部助教授

昭和58年4月 本学農学部助教授

平成6年6月 本学農学部教授

平成8年4月 本学農学生命科学研究科教授

所属：農業・資源経済学専攻 農業構造・経営学大講座 農政学分野

専門分野：農業経済学、農政学、ドイツ農業論

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・谷口信和『20世紀社会主義農業の教訓』農山漁村文化協会, 1999年.

・谷口信和「農業生産構造の変化と政策転換—米政策改革をめぐって—」『農業経済研究』第76巻第2号(2004年)：

樋口 廣芳 教授

(本学在職期間：昭和52年4月～昭和63年3月、平成6年6月～平成24年3月)



昭和45年3月
宇都宮大学農学部畜産学科卒業
昭和47年3月
宇都宮大学大学院農学研究科畜産学専攻修士課程修了

昭和50年3月

本学大学院農学系研究科林学専門課程博士課程修了、農学博士

昭和52年4月 本学農学部助手

昭和63年4月 (財)日本野鳥の会・研究センター所長

平成6年6月 本学農学部教授

平成8年4月 本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：生圏システム学専攻 生物多様性科学研究室

専門分野：生態学、保全生物学、鳥類学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・樋口広芳『生命にぎわう青い星—生物の多様性と私たちのくらし—』化学同人社、2010年。

・Higuchi, H., Pierre J. P., Krever, V., Andronov, V., Fujita, G., Ozaki, K., Goroshko, O., Ueta, M., Smirensky, S. & Mita, N. "Using a remote technology in conservation: satellite-tracking White-naped Cranes in Russia and Asia." *Conservation Biology* 18 (2004): 136-147.

寶月 岱造 教授

(本学在職期間：昭和54年12月～平成24年3月)



昭和46年6月
本学理学部生物学科卒業
昭和51年3月
本学理学系研究科植物学課程修了
平成元年11月
本学大学院農学系研究科助教授

平成7年1月 本学大学院農学生命科学研究科教授

平成17年10月～平成20年3月

アジア生物資源環境研究センター長

所属：森林科学専攻 森林生命環境学大講座 森林植物学分野

専門分野：森林分子生態学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・宝月岱造「外生菌根菌ネットワークの構造と機能」『土と微生物』64巻(2010):57-63

・宝月岱造「富士山火山荒原における先駆植物の定着様式」『学際』15巻(2005):16-20

宮崎 毅 教授

(本学在職期間：昭和62年12月～平成24年3月)



昭和46年6月
本学農学部農業工学科卒業
昭和48年3月
本学大学院農学系研究科農業工学専門課程修士課程修了
昭和51年3月
本学大学院農学系研究科農業工学専門課程博士課程修了、農学博士(東京大学)

昭和51年 本学農学部研究生

昭和51年7月 日本学術振興会奨励研究員

昭和52年4月 農林省四国農業試験場研究員

昭和56年8月

米国カリフォルニア大学デイビス校客員研究員

昭和59年4月 四国農業試験場土地利用部主任研究官

昭和59年10月 農業土木試験場水利部主任研究官

昭和61年4月

農業土木試験場農地整備部農地整備第3研究室長

昭和62年12月 本学農学部助教授

平成8年4月 本学大学院農学生命科学研究科助教授

平成10年8月 本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：生物・環境工学専攻 地域環境工学講座 環境地水学分野

専門分野：農業農村工学、環境地水学、土壌物理学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・宮崎毅『環境地水学』東京大学出版会、2000年。

・Tsuyoshi Miyazaki "Bulk Density Dependence of Air Entry Suctions and Saturated Hydraulic Conductivities of Soils." *Soil Science* Vol.161, No.8, (1996): 484-490.

若木 高善 教授

(本学在職期間：平成8年2月～平成24年3月)

昭和46年6月 本学理学部生物化学科卒業

昭和48年3月 本学農学系大学院修士課程修了

昭和53年3月 本学農学系大学院博士課程単位取得後退学

昭和57年2月 農学博士(東京大学)

昭和59年4月 東京工業大学理学部助手

平成8年2月 本学大学院農学生命科学研究科助教授

平成22年4月 本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：応用生命工学専攻 生物機能工学講座 酵素学分野

専門分野：超好熱菌等の酵素学、構造生物学、タンパク質科学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・若木高善分担執筆『古細菌の生物学』（古賀洋介・亀倉正博編）東京大学出版会，1998年。
- ・Shinya Fushinobu, Hiroshi Nishimasu, Daiki Hattori, Hyun-Jin Song & Takayoshi Wakagi, "Structural basis for the bifunctionality of fructose-1,6-bisphosphate aldolase/phosphatase" *Nature* 478 (27 October 2011): 538-541.

渡部 終五 教授

（本学在職期間：昭和52年10月～平成24年3月）



昭和46年6月
本学農学部水産学科卒業
昭和51年3月
本学大学院農学系研究科博士課程修了（農学博士）
昭和51年6月
財団法人海洋生物環境研究所研究員

昭和52年10月 本学農学部助手
平成2年10月 本学農学部助教授
平成7年6月 本学農学部教授
平成8年4月 本学大学院農学生命科学研究科教授
所属：水圏生物科学専攻水産化学分野
専門分野：水圏生化学、水産利用化学
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・渡部終五『水圏生化学の基礎』恒星社厚生閣，2008年
・Gyu-Chul Hwang, Shugo Watabe, and Kanehisa Hashimoto "Changes in carp myosin ATPase induced by temperature acclimation." *J. Comp. Physiol. B*, 160 (1990): 233-239.

大学院経済学研究科・経済学部

奥田 央 教授

（本学在職期間：昭和50年4月～昭和53年3月、昭和54年7月～平成24年3月）



昭和45年4月
本学経済学部経済学科卒業
昭和47年3月
本学大学院経済学研究科修士課程修了
昭和50年3月
本学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学

昭和50年4月～昭和53年3月
本学社会科学研究所助手
昭和54年7月 本学経済学部助教授
平成元年12月 本学経済学部教授

平成8年4月 本学大学院経済学研究科教授

所属：現代経済専攻 国際経済講座

専門分野：ロシア農民史（1917～1941年）

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- ・奥田央『ヴォルガの革命—スターリン統治下の農村』東京大学出版会，1996。
- ・Хирози Окуда." «От сохи к портфелю»: деревенские коммунисты и комсомольцы в процессе раскрестьянивания (1920-е – начало 1930-х гг.)" *История сталинизма: итоги и проблемы изучения. Материалы международной конференции научной конференции. Москва, 5-7 декабря 2008 г. М., 2011: 495-527.*

三輪 芳朗 教授

（本学在職期間：昭和61年10月～平成24年3月）



昭和45年4月
本学経済学部経済学科卒業
昭和47年3月
本学大学院経済学研究科修士課程修了
昭和51年3月
本学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学

昭和61年10月 本学経済学部助教授
平成元年12月 本学経済学部教授
平成8年4月 本学大学院経済学研究科教授
所属：金融システム専攻 金融経済学講座
専門分野：産業組織、金融、規制、法と経済学、日本経済
研究内容（代表的な著書や論文等）：
・*Firms and Industrial Organization in Japan*, Macmillan, 1996.
・三輪芳朗「計画的戦争準備・軍需動員・経済統制—続『政府の能力』」有斐閣，2008。

森 建資 教授

（本学在職期間：昭和63年10月～平成24年3月）



昭和46年3月
国際基督教大学教養学部社会科学科卒業
昭和48年6月
本学大学院経済学研究科修士課程修了
昭和52年7月
本学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学

昭和63年10月 本学農学部助教授
平成5年4月 本学経済学部助教授
平成6年4月 本学経済学部教授
平成8年4月 本学大学院経済学研究科教授

所属：経営専攻 企業・市場組織講座
専門分野：労使関係、イギリス経済史
研究内容（代表的な著書や論文等）：
・森建資『雇用関係の生成』木鐸社、1988年。
・「1950年代の日英通商関係」『経済学論集』76巻4号、77巻1号、77巻2号、2011年。

大学院総合文化研究科・教養学部

池田 信雄 教授

（本学在職期間：昭和57年4月～平成24年3月）



昭和46年3月
東京都立大学人文学部卒業
昭和48年3月
東京都立大学人文科学研究科修士課程修了
昭和50年4月
名古屋大学教養部専任講師

昭和56年4月 名古屋大学助教授
平成5年8月 本学教養学部教授
平成18年1月～平成21年3月 駒場美術博物館館長
平成21年4月～平成24年3月
本学バリアフリー支援室長
所属：言語情報科学専攻
専門分野：近現代ドイツ文学研究（18・19・20世紀ドイツ文学）、対象言語文化分析
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・池田信雄共著『シリーズ言語態6「間文化の言語態」』東京大学出版会、2002年。
・「よそなるわたし ―ジャン・パウルのユーモリストについて―」『ドイツ文学』87、1991。

井上 健 教授

（本学在職期間：平成17年10月～平成24年3月）



昭和49年3月
本学文学部英語英米文学科卒業
昭和52年3月
本学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専修修士課程修了

昭和52年4月 大谷女子大学文学部英文学科講師
昭和56年4月 神戸大学教養部講師
昭和57年11月 神戸大学教養部助教授
昭和61年10月 京都大学教養部助教授
平成2年10月 東京工業大学工学部助教授
平成5年11月 東京工業大学工学部教授
平成8年5月
東京工業大学外国語研究教育センター教授（配置換）

平成10年4月
東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授（併任）

平成10年4月
東京工業大学外国語研究教育センター長（併任）

平成17年10月 本学大学院総合文化研究科教授
所属：超域文化科学専攻 比較文学比較文化コース
専門分野：比較文学、アメリカ文学
研究内容（代表的な著書・論文等）：

・『文豪の翻訳力 ―近現代日本の作家翻訳』（武田ランダムハウスジャパン、2011年）
・「日本文学とポー」、八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』研究社、2009年。

奥野 誠 准教授

（本学在職期間：昭和56年4月～平成24年3月）



昭和46年6月
本学教養学部基礎科学科卒業
昭和52年3月
本学理学系大学院相関理化学専攻博士課程修了
昭和56年4月
本学教養学部助手

昭和63年4月 本学教養学部助教授
平成8年4月 本学大学院総合文化研究科准教授
所属：広域科学専攻 生命環境科学系
専門分野：細胞生理学、生殖生物学、宇宙生物学
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・奥野誠、山下雅道、馬場昭次 監修・著『生命の起源をさぐる 宇宙からよみとく生物進化』東京大学出版会、2010年。
・Chinatu Mukai and Makoto Okuno. Glycolysis plays a major role for ATP supplementation in mouse sperm flagellar movement. Biology of Reproduction Vol. 71 (2004)

黒田 玲子 教授

（本学在職期間：昭和61年4月～平成24年3月）



昭和45年3月
お茶の水女子大学理学部卒業
昭和50年3月
本学大学院理学系研究科博士課程修了・理学博士

昭和50年6月
英国ロンドン大学キングスカレッジ リサーチアソシ

エイト、リサーチフェロー、英国ガン研究所シニアスタッフサイエンティストを経て

昭和61年4月 本学教養学部助教授

平成4年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

平成15年4月 本学総長特任補佐

平成19年4月 本学経営協議会委員

平成22年4月

教養教育高度化機構科学技術インタープリター養成部門長

所属：広域科学専攻 生命環境科学系 生命情報学大講座 理学系研究科生物化学専攻兼担

専門分野：生物物理化学、分子認識特にキラリティー（左右非対称性）の科学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・ R. Kuroda. Chirality in Crystals in *Engineering of Crystalline Materials Properties*. Berlin: Springer, 2008: 251-270.

・ R. Kuroda, B. Endo, M. Abe and M. Shimizu. "Chiral blastomere arrangement dictates zygotic left-right asymmetry pathway in snails." *Nature*, 462, (2009): 790-794.

小宮山 進 教授

（本学在職期間：昭和57年4月～平成24年3月）



昭和46年6月

本学教養学部基礎科学科卒業

昭和48年3月

本学大学院理学系研究科相関理化学修士課程修了

昭和51年3月

本学大学院理学系研究科相関理化学博士課程修了

昭和54年5月 ハンブルグ大学応用物理学科助手

昭和57年4月 本学教養学部助教授

平成4年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：広域科学専攻 相関基礎科学系 機能解析学大講座

専門分野：物性物理学実験

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・ Susumu Komiyama. Edge states and nonlocal effects: §3.2, 120-131 in *Mesoscopic Physics and Electronics*, eds. by T. Ando, Y. Arakawa, K. Furuya, S. Komiyama and H. Nakashima, Springer Verlag, 1998.

・ Susumu Komiyama, Oleg Astafiev, Vladimir Antonov, Hiroshi Hirai and Takeshi Kutsuwa "A single-photon detector in the far-infrared range." *Nature* 403, (2000): 405-407.

丹治 愛 教授

（本学在職期間：平成元年4月～平成24年3月）



昭和50年3月

本学文学部英語英米文学科卒業

昭和53年3月

本学大学院人文科学研究科修士課程（英文学専攻）修了

昭和55年3月

本学大学院人文科学研究科博士課程（英文学専攻）中途退学

平成元年4月 本学教養学部助教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科助教授

平成10年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：言語情報科学専攻

専門分野：イギリス世紀末・モダニズム文学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・ 丹治愛『ドラキュラの世紀末 ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会, 1997年.

・ Ai Tanji, "The Sirens Episode in *Ulysses*: Words Enchanted by Music" 『英文学研究』第62巻第2号, 日本英文学会 (1985年), pp. 309-27.

中澤 英雄 教授

（本学在職期間：昭和60年4月～平成24年3月）



昭和46年6月

本学教養学部教養学科ドイツ科卒業

昭和48年3月

本学大学院人文科学研究科修士課程（比較文学比較文化専攻）修了（文学修士）

昭和48年4月

本学教養学部教養学科ドイツ科助手

昭和50年4月 千葉大学教養部講師（ドイツ語）

昭和60年4月 本学教養学部助教授（配置換）

平成7年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：言語情報科学専攻 ドイツ語部会

専門分野：カフカを中心としたドイツ語系ユダヤ知識人の問題

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・ 中澤英雄『カフカ ブーバー シオニズム』オンブックス, 2011年.

・ 中澤英雄「多民族の共存から世界平和へ ―ザッハー＝マゾッホの多文化的世界」『問文化の言語態』（東大出版会）, 2002年, 119～139頁.

林 文代 教授

(本学在職期間：昭和63年4月～平成24年3月)



昭和46年3月
早稲田大学第一文学部英文科卒業
昭和49年3月
本学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了

昭和50年～52年

米国インディアナ大学大学院博士課程留学（フルブライト奨学生）

昭和55年3月

本学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学

昭和55年4月 早稲田大学法学部専任講師

昭和58年4月 早稲田大学法学部助教授

昭和60年11月

インディアナ大学英文学博士号取得（Ph.D.）

昭和63年4月 本学教養学部助教授

平成5年4月 本学教養学部教授

所属：言語情報科学専攻 言語態講座

専門分野：英米文学、メディア・コミュニケーション論

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・林 文代『迷宮としてのテキスト —フォークナーのエクリチュールへの誘い』東京大学出版会, 2004年.

・Fumiyo Hayashi. "Absorbed in Reading the 'Worst Heart of the World': Faulkner, Twain, and Their 'Failed Detectives'", Robert W. Hamblin and Melanie Speight eds., *Faulkner and Twain*, Southeast Missouri State University Press, (2009): 134-153.

三角 洋一 教授

(本学在職期間：昭和59年4月～平成24年3月)



昭和45年5月
本学文学部国語国文学専修課程卒業
昭和47年3月
本学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了

昭和48年3月

本学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中途退学

昭和48年4月 高知大学文理学部助手・講師

昭和54年4月 白百合女子大学文学部講師・助教授

昭和59年4月 本学教養学部学助教授

平成4年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：超域文化科学専攻 比較文学比較文化分野

文化コンプレキシティ大講座基層文化論講座

専門分野：日本古典文学、仏教文学、和漢比較文学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・三角洋一『宇治十帖と仏教』若草書房, 2011年.

・三角洋一『『海道記』の動物描写について』『国語と国文学』第85巻2号（1208年）：1-12.

山影 進 教授

(本学在職期間：昭和55年4月～平成24年3月)

昭和47年3月 本学教養学部卒業

昭和49年3月 本学大学院社会学研究科修士課程修了

昭和51年12月 京都大学東南アジア研究センター助手

昭和55年4月 本学教養学部助教授

平成3年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

平成21年2月～平成23年2月

本学大学院総合文化研究科長

所属：国際社会科学専攻 国際関係論大講座

専門分野：国際関係理論、比較地域体系論、人工社会構築論

研究内容（代表的な著書・論文等）

・山影進『ASEAN シンボルからシステムへ』東京大学出版会, 1991年.

・山影進「国際政治学の基本枠組みとその動揺—国民国家体系の安定性の検討」『国際法外交雑誌』89巻(1990年)：123-152頁

湯浅 博雄 教授

(本学在職期間：昭和61年4月～平成24年3月)

昭和47年4月 本学文学部卒業

昭和53年4月 本学大学院人文科学研究科博士課程修了

昭和61年4月 本学教養学部助教授

平成3年4月 本学教養学部教授

所属：言語情報科学専攻

専門分野：言語態理論・フランス文学、思想

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・湯浅博雄『応答する呼びかけ —言葉の文学的次元から他者関係の次元へ』、未来社、2009年。

・Hiroo Yuasa, « Sur les rapports entre les *Lettres du voyant et Alchimie du verbe* », in « *Je m' évade! Je m' explique. — Résistances d' Une saison en enfer* », *Etudes réunies par Yann Frémy*, éditions classiques garnier, Paris, 2010, pp.105-118.

大学院教育学研究科・教育学部

佐藤 学 教授

(本学在職期間：1988年4月～2012年3月)



1975年3月
東京教育大学教育学部卒業
1977年3月
本学大学院教育学研究科修士課程修了
1980年3月
本学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学

1983年4月 三重大学教育学部助教授
1988年4月 本学教育学部助教授
1989年2月 教育学博士(東京大学)
1997年3月 本学大学院教育学研究科教授
2004年4月～2006年3月 本学大学院教育学研究科長
所属：学校教育高度化専攻 教職開発コース
専門分野：学校教育学
研究内容(代表的な著書・論文等)：
・佐藤学『学びの快樂－対話的实践へ』世織書房，1999年。
・佐藤学「実践的探究としての教育学＝技術的合理性に対する批判の系譜」『教育学研究』第63巻3号(1996年) :pp.278-285.

大学院薬学系研究科・薬学部

杉山 雄一 教授

(本学在職期間：昭和49年4月～平成24年3月)



昭和46年3月
本学薬学部卒業
昭和48年3月
本学大学院薬学系研究科修士課程修了
昭和49年4月
本学大学院薬学系研究科教務職員
昭和51年5月
本学薬学部助手

平成元年2月 本学薬学部助教授
平成3年10月 本学薬学部教授
平成9年4月 本学総長補佐
平成20年4月 本学薬学系研究科長・学部長
所属：生命薬学専攻 医療薬学講座 分子薬物動態学教室
専門分野：薬物動態学
研究内容(代表的な著書・論文等)：
・Giacomini KM and Sugiyama Y. *Membrane transporters and drug response*, in "Goodman & Gilman's The Pharmacological Basis of Therapeutics 12th Edition", (Brunton LL, Chabner BA, Knollman B, eds) NY: McGraw-Hill Companies, New York, 2011.
・Watanabe T, Kusuhara H, and Sugiyama Y.

"Application of physiologically based pharmacokinetic modeling and clearance concept to drugs showing transporter-mediated distribution and clearance in humans." *J Pharmacokinetic Pharmacodyn* 37(2010) : 575-590.

大学院数理科学研究科

北田 均 准教授

(本学在職期間：昭和52年11月～平成24年3月)



昭和48年3月
本学理学部数学科卒業
昭和50年3月
大阪市立大学大学院理学研究科修士課程数学専攻修了
昭和50年4月
厚生省技官行政職(上級甲種)

昭和52年11月 本学教養学部基礎科学科助手
昭和54年2月 理学博士(東京大学)
昭和57年4月 本学教養学部助教授
平成4年4月 本学大学院数理科学研究科助教授
平成19年4月 本学大学院数理科学研究科准教授
所属：基礎解析学大講座
専門分野：解析学、散乱理論、数学的量子力学、量子力学的時間、数学基礎論
研究内容(代表的な著書・論文等)：
・北田均『フーリエ解析の話』現代数学社，2007年。
・Hitoshi Kitada, "Scattering theory for the fractional power of negative Laplacian." *J. Abstr. Differ. Equ. Appl.* 1 (2010), No. 1, 1-26.

大学院新領域創成科学研究科

岩田 修一 教授

(本学在職期間：昭和53年5月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部原子力工学科卒業
昭和48年3月
本学大学院工学系研究科原子力工学修士課程修了
昭和50年3月
工学博士(東京大学)

昭和55年10月 本学工学部総合試験所助教授
平成3年10月 本学工学部原子力工学科教授
平成9年4月 本学人工物工学研究センター長
平成16年4月 本学新領域創成科学研究科教授
所属：人間環境学専攻 環境デザイン分野
専門分野：データ科学 材料設計 原子炉材料
研究内容(代表的な著書・論文等)：

- ・三島良績、岩田修一共編著『新材料開発と材料設計学』ソフトサイエンス社, 1985年.
- ・Shuich Iwata & Robert S. Chen “ Science and the Digital Divide.” *Science* 310, (2005): 405.

神田 順 教授

(本学在職期間：昭和55年4月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部建築学科卒業
昭和47年3月
本学工学系研究科建築学専攻修士修了
昭和47年4月 竹中工務店
昭和54年
PhD (エディンバラ大学、英国)
昭和55年4月
本学工学部助教授

平成8年9月 本学工学部教授

平成11年4月 本学新領域創成科学研究科教授

所属：社会文化環境学専攻 空間環境学講座

専門分野：風工学、地震工学、構造安全論

研究内容 (代表的な著書・論文等)：

- ・神田順『建築構造計画概論』共立出版, 2012年.
- ・Jun Kanda and Bruce Ellingwood. “ Formulation of load factors based on optimum reliability.” *Structural Safety*, 9, (1991).

國島 正彦 教授

(本学在職期間：昭和62年10月～平成24年3月)



昭和46年6月
本学工学部土木工学科卒業
昭和48年3月
本学大学院工学系研究科土木工学専門課程修士課程修了
昭和48年4月
清水建設株式会社入社
土木技術部

昭和62年10月 本学工学部土木工学科助教授

平成3年4月 本学工学部土木工学科教授

平成11年4月

本学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻国際環境基盤大講座教授

(兼任) 本学大学院工学系研究科・工学部社会基盤学科

平成18年4月

本学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系国際協力学専攻教授

(兼任) 本学工学部社会基盤学科

所属：国際協力学専攻 開発協力講座 都市環境学分野

専門分野：建設プロジェクトマネジメント

研究内容 (代表的な著書・論文等)：

- ・國島正彦、庄子幹雄編著『建設マネジメント原論』山海堂, 1994年.
- ・國島正彦「公共工事システムの将来像」『会計検査研究』第12号 (1995年) 65-81.

濱野 保樹 教授

(本学在職期間：平成11年4月～平成24年3月)



昭和50年3月
国際基督教大学教養学部卒業
昭和55年3月
国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学
昭和55年4月
国際基督教大学教育学科助手

昭和57年4月

新潟大学教育学部附属教育実践研究指導センター助手

昭和58年4月

文部省メディア教育開発センター助教授

平成11年4月

本学大学院新領域創成科学研究科助教授

平成15年11月 工学博士 (東京大学)

平成16年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授

所属：環境学系研究系 人間環境学専攻 メディア環境学講座

専門分野：メディア論、コンテンツ制作・流通

研究内容 (代表的な著書・論文等)：

- ・浜野保樹『表現のビジネス』東京大学出版会, 2003年.
- ・浜野保樹「コンテンツ表現技術の研究と歴史の課題」『映像情報メディア学会誌』Vol.59, No.12 (2005年), 8-12頁.

大学院情報理工学系研究科

土肥 健純 教授

(本学在職期間：昭和52年4月～平成24年3月)



昭和47年4月
本学工学部精密機械工学科卒業
昭和52年3月
本学大学院工学系研究科精密機械工学専攻博士課程修了、工学博士 (東京大学)
昭和52年4月
本学工学部助手
昭和52年10月
本学医科学研究所研究生

昭和54年4月

東京電機大学工学部精密機械工学科講師

昭和55年10月

東京電機大学工学部精密機械工学科助教授

昭和56年4月 本学工学部助教授

昭和63年7月 本学工学部教授

平成7年4月 本学大学院工学系研究科教授

平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授

平成13年4月 本学大学院情報理工学系研究科教授

所属：知能機械情報学専攻

専門分野：医療・福祉工学、コンピュータ外科学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・Dohi T. et al. "Computer aided surgery(CAS): Development of surgical simulation and planning system with 3-D graphic reconstruction." Proc. of the 1st Visualization in Biological Computing(BVC, 現：MICCAD), (1990): 458-462.

・小谷誠、福井康裕、松尾正之、土肥健純『メディカル・エンジニアリング』朝倉書店、1991年.

医科学研究所

岩倉 洋一郎 教授

(本学在職期間：昭和60年10月～平成24年3月)



昭和45年3月

京都大学理学部卒業

昭和49年10月

京都大学大学院理学研究科
化学専攻博士課程中退

昭和49年11月

京都大学ウイルス研究所細
胞ウイルス部助手

昭和53年9月～55年8月

米国スローンケタリング癌研究所

Associate Researcher

昭和60年10月

本学医科学研究所ウイルス感染研究部助教授

平成4年11月

本学医科学研究所実験動物研究施設教授

平成5年1月～平成8年3月

本学医科学研究所実験動物研究施設長

平成10年7月

本学医科学研究所ヒト疾患モデル研究センター教授

平成16年4月

本学医科学研究所ヒト疾患モデル研究センター長

平成21年7月

システム疾患モデル研究センターに改組、同センター
長、教授

所属：理学系研究科生物化学専攻 新領域創成科学研究
科情報生命科学専攻 医学系研究科病因・病理学
専攻 農学生命科学研究科獣医学専攻

専門分野：免疫学、実験動物学、ウイルス学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・Iwakura, Y., Ishigame, H., Saijo, S., and Nakae, S.
Functional specialization of IL-17 family members.
Immunity, 34 (2011): 149-162.

・岩倉洋一郎編「免疫疾患—疾患モデルの作製と利用」、
エル・アイ・シー、2011年.

笹川 千尋 教授

(本学在職期間：昭和53年4月～平成24年3月)



昭和47年

千葉大学理学部卒業

昭和49年

千葉大学大学院薬学研究科
修士課程修了

昭和53年3月

本学大学院医学研究科第三
基礎医学系博士課程修了
(医学博士)

昭和53年4月 本学医科学研究所助手

昭和55年10月 米国ワシントン大学医学部留学

昭和58年10月 本学医科学研究所助手

昭和61年2月 本学医科学研究所助教授

平成7年12月 本学医科学研究所教授

平成10年10月～平成13年3月

大阪大学微生物病研究所教授（併任）

平成12年4月～平成17年3月

本学医科学研究所感染免疫大部部門長

平成17年4月

本学医科学研究所感染症国際研究センター教授（兼任）

所属：細菌感染分野 感染免疫部門 感染症国際研究セ
ンター

専門分野：微生物学、細菌学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

・笹川千尋（林哲也共編）『医科細菌学』南江堂、2008
年.

・Chihiro Sasakawa. "A new paradigm of bacteria-gut
interplay brought through the study of *Shigella*." *Proc.
Jpn. Acad. Ser. B Phys. Biol. Sci.* 86, no. 3 (2010): 229-
243.

中村 義一 教授

(本学在職期間：昭和53年4月～平成24年3月)



昭和47年3月

京都大学理学部卒業

昭和52年3月

京都大学大学院理学研究科
博士課程修了、理学博士(京
都大学)

昭和53年4月

本学医科学研究所助手

昭和61年6月

本学医科学研究所助教授

平成12年10月 本学医科学研究所教授
所属：基礎医科学部門 遺伝子動態分野 生物化学専攻
メデイカルゲノム専攻
専門分野：分子遺伝学、RNA創薬化学
研究内容（代表的な著書・論文等）：
・田原総一郎・中村義一『RNAルネッサンスー遺伝子
新革命』医薬経済社、2006年。
・K. Ito, M. Uno and Yoshikazu Nakamura, "A
tripeptide 'anticodon' deciphers stop codons in
messenger RNA." *Nature* 403 (2000): 680-684.

森本 幾夫 教授

(本学在職期間：平成7年3月～平成24年3月)



昭和48年3月
慶應義塾大学医学部卒業
昭和52年3月
慶應義塾大学大学院医学研
究科博士課程（内科学）修
了
昭和57年～昭和63年
ハーバード大学内科
Assistant Professor

昭和63年～平成7年

ハーバード大学内科 Associate Professor

平成7年3月

本学医科学研究所ウイルス疾患診療部教授

平成7年3月～平成13年9月

ハーバード大学内科 Visiting Professor

平成12年5月

本学医科学研究所先端医療研究センター免疫病態分野
教授

平成13年10月～平成17年8月

テキサス大学MD Anderson癌センター客員教授

平成18年10月

本学医科学研究所附属病院アレルギー免疫科科長

平成20年4月～平成21年3月

本学医科学研究所附属病院副院長

平成20年4月

本学医科学研究所先端医療研究センター長

平成23年

Highly cited Researcher for Immunology (Thomson
ISI) (2000-2010)

所属：先端医療研究センター免疫病態分野

専門分野：内科学、アレルギーリウマチ学、臨床免疫学
研究内容（代表的な著書・論文等）：

・Morimoto C, Schlossman SF. "The structure and
function of CD26 in the T-cell immune response."
Immunol review 161 (1998): 55-70.

・Ohnuma K, Dang NH, Morimoto C. "Revisiting an
old acquaintance: CD26 and its molecular mechanisms

in T cell function." *Trends Immunol* 29, no.6 (2008):
295-301.

山本 雅 教授

(本学在職期間：昭和55年9月～平成24年3月)



昭和47年3月
大阪大学理学部卒業
昭和52年3月
大阪大学大学院理学研究科
博士課程修了（理学博士）
昭和52年9月
米国立がん研究所研究員

昭和55年9月 本学医科学研究所助手

昭和61年4月 本学医科学研究所助教授

平成3年11月 本学医科学研究所教授

平成15年4月～平成19年3月 本学医科学研究所長

平成17年10月～平成23年9月 日本学術会議会員

平成23年4月 沖縄科学技術大学院大学教授兼任

所属：がん細胞増殖部門 細胞シグナル分野

専門分野：分子生物学、分子腫瘍学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

・田矢洋一、野田亮、山本雅 共著『がん遺伝子ハンテ
ィング』羊土社、1992年。

・Tadashi Yamamoto, Hiroshi Hihara, Tsutomu
Nishida, Sadaaki Kawai, and Kumao Toyoshima. "A
new avian erythroblastosis virus, AEV-H, carries erbB
gene responsible for the induction of both
erythroblastosis and sarcomas." *Cell* 34, (1983):
225-232.

地震研究所

都司 嘉宣 准教授

(本学在職期間：昭和60年10月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部卒業
昭和47年3月
本学大学院理学系研究科修
士課程修了
昭和48年7月
本学大学院理学系研究科博
士課程退学
昭和57年4月
理学博士（東京大学）

昭和48年8月 国立防災科学技術センター研究員

昭和60年10月 本学地震研究所助教授

平成12年4月～平成20年3月 歴史地震研究会会長

平成19年4月 本学地震研究所准教授

所属：災害科学系研究部門

専門分野：津波・史料地震学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- ・都司嘉宣『千年震災』, ダイヤモンド社, pp276, 2011
- ・Y.Tsuji, Y.Tanioka, H.Matsutomi, Y.Nishimura, T.Kamataki, Y.Murakami, T.Sakakiyama, A.Moore, G.Gelfenbaum, S.Nugroho, B.Waluyo, I.Sukanta, R.Triyono and Y.Namegaya, "Damage and Height Distribution of Sumatra Earthquake-Tsunami of December 26, 2004, in Banda Aceh City and its Environs." *Journal of Disaster Research*, 1, 1, (2006): 103-115.

東洋文化研究所

丘山 新 教授

(本学在職期間：平成2年4月～平成24年3月)



昭和47年3月
京都大学理学部物理学卒業
昭和51年3月
本学大学院人文科学研究科
印度哲学印度文学専攻修士
課程修了

昭和54年3月

本学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士
課程退学

平成2年4月 本学東洋文化研究所助教授

平成6年4月 本学東洋文化研究所教授

所属：東アジア研究部門

専門分野：仏教思想史

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・丘山新『菩薩の願い—大乗仏教のめざすもの』日本放送出版協会, 2007年.
- ・丘山新『アジアの幸福論』春秋社, 2005年.

尾崎 文昭 教授

(本学在職期間：昭和54年4月～昭和58年9月、平成8年4月～平成24年3月)



昭和47年3月
本学文学部第三類（語学文学）卒業
昭和50年3月
本学大学院人文科学研究科
中国語中国文学専門課程修士
課程修了

昭和54年3月

本学大学院人文科学研究科中国語中国文学専門課程博士
課程退学

平成元年4月 明治大学助教授

平成8年4月 本学東洋文化研究所教授

所属：東アジア研究部門

専門分野：中国近現代文学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・尾崎文昭「魯迅の「多疑」思惟方式についての試論」『魯迅研究の現在』汲古書院, 1992年, pp.73～94.
- ・「中国近現代文学の基本構造とその終焉についての試論」, 東京大学東洋文化研究所編『アジア学の将来像』, 東京大学出版会, 2003年.

加納 啓良 教授

(本学在職期間：昭和55年10月～平成24年3月)



昭和45年4月
本学経済学部経済学科卒業
昭和55年10月
本学東洋文化研究所助教授
平成3年6月
本学東洋文化研究所教授

所属：南アジア研究部門

専門分野：東南アジア経済史、インドネシア研究

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・加納啓良『現代インドネシア経済史論—輸出経済と農業問題』東京大学出版会, 2004年.
- ・「インドネシア農村経済論」勁草書房, 1988年.

鈴木 董 教授

(本学在職期間：昭和58年4月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学法学部第三類（政治コース）卒業
昭和47年3月
本学大学院法学政治学研究科政治専門課程修士課程修了

昭和57年9月

本学大学院法学政治学研究科政治専門課程博士課程修了、法学博士号取得

昭和58年4月 本学東洋文化研究所助教授

平成3年7月 本学東洋文化研究所教授

所属：西アジア研究部門

専門分野：オスマン帝国史、中東・イスラム研究、比較史・比較文化

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・鈴木董『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会, 1993年.
- ・鈴木董「イスラムの家からバベルの塔へ—オスマン帝

国における諸民族の統合と共存」リポート, 1993年.

社会科学研究所

田中 信行 教授

(本学在職期間：1991年4月～2012年3月)

1973年3月 早稲田大学第一法学部卒業

1975年3月

東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了

1981年3月

東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学

1991年4月 本学社会科学研究所助教授

1994年4月 本学社会科学研究所教授

所属：比較現代法部門

専門分野：現代中国法

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- ・田中信行『最新 中国ビジネス法の理論と実務』（共著）弘文堂, 2011年.
- ・田中信行『現代中国法』（共著）成文堂, 2004年.

生産技術研究所

岡野 達雄 教授

(本学在職期間：昭和49年3月～平成24年3月)

昭和45年3月 本学工学部物理工学科卒業

昭和47年3月

本学大学院工学系研究科物理工学専門課程修士課程修了

昭和49年2月

本学大学院工学系研究科物理工学専門課程博士課程退学

昭和56年2月 工学博士（東京大学）

昭和58年8月 本学生産技術研究所助教授

平成3年6月 本学生産技術研究所教授

所属：基礎系部門 真空物理工学分野

専門分野：真空界面物理

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- ・岡野達雄(分担)『丸善実験物理学講座/表面物性測定』, 丸善, 2001.
- ・Tatsuo Okano. "Measurement of field-emission current-fluctuations by digital autocorrelation of electron-counting" *Japanese Journal of Applied Physics* 24(1985): L764-767.

黒田 和男 教授

(本学在職期間：昭和51年4月～平成24年3月)



昭和46年6月

本学工学部物理工学科卒業

昭和48年3月

本学大学院工学系研究科物理工学専門課程修士課程修了

昭和51年3月

本学大学院工学系研究科物理工学専門課程博士課程修了

昭和58年8月 本学生産技術研究所助教授

平成5年1月 本学生産技術研究所教授

所属：基礎系部門 量子光学デバイス分野

専門分野：量子光学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- ・黒田和男『非線形光学』コロナ社, 2008.
- ・Kazuo Kuroda. "Theory of a high-intensity multimode laser" *Physical Review A* 19, No.1 (1977): 437.

渡辺 正 教授

(本学在職期間：昭和50年7月～平成24年3月)



昭和45年3月

本学工学部工業化学科卒業

昭和47年3月

本学大学院工学系研究科工業化学専門課程修士課程修了

昭和50年3月

本学大学院工学系研究科工業化学専門課程博士課程単位取得退学

昭和51年3月 工学博士（東京大学）

昭和61年3月 本学生産技術研究所助教授

平成4年7月 本学生産技術研究所教授

所属：附属サステナブル材料国際研究センター 持続性材料化学分野

専門分野：生体機能化学 環境科学

研究内容（代表的な著書・論文等）：

- ・渡辺正『「地球温暖化」神話：終わりの始まり』丸善, 2012年.
- ・Y. Kato, M. Sugiura, A. Oda, T. Watanabe. "Spectroelectrochemical Determination of the Redox Potential of Pheophytin a, the Primary Electron Acceptor in Photosystem II." *Proc. Acad. Sci. USA*, 106, No.41, (2009): 17365-17370.

宇宙線研究所

福來 正孝 教授

(本学在職期間：平成8年6月～平成24年3月)



昭和45年3月
大阪大学理学部物理学卒業
昭和47年3月
本学大学院理学系研究科物理学専門課程修士課程修了
昭和49年11月
本学大学院理学系研究科物理学専門課程博士課程退学

昭和52年12月 理学博士(東京大学)

昭和58年4月 京都大学助教授

平成8年6月 本学宇宙線研究所教授

所属：宇宙基礎物理学研究部門

専門分野：Cosmology: theoretical and observational
研究内容(代表的な著書・論文等)：

・ M. Fukugita et al. "The Sloan Digital Sky Survey photometric system." *Astron. J.* 111, No.4 (1996) : 1748-1756.

・ M. Fukugita and T. Yanagida. *Physics of Neutrinos and applications to astrophysics.* Berlin : Springer-Verlag, 2003.

物性研究所

柿崎 明人 教授

(本学在職期間：昭和60年4月～平成9年5月、平成13年5月～平成24年3月)



昭和45年3月
東北大学理学部物理学第二学科卒業
昭和50年3月
東北大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士)
昭和60年4月
本学物性研究所助教授

平成9年6月 高エネルギー加速器研究機構教授

平成13年5月 本学物性研究所教授

所属：附属軌道放射物性研究施設

専門分野：放射光科学 物性物理学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・ A. Kakizaki. "Temperature dependence of spin- and angle-resolved photoemission of Ni" :

Band-Ferromagnetism ed. K. Baberschke et al. (Springer, 2001) pp.111-125.

久保田 実 准教授

(本学在職期間：昭和61年10月～平成24年3月)



昭和46年3月
東北大学理学部物理学第二学科卒業
昭和46年4月～
昭和47年3月
東北大学理学部物理学第二学科研究生

昭和47年4月～昭和53年3月

大阪市立大学理学研究科物理学専攻修士課程修了、及び博士課程単位取得

昭和53年4月～昭和61年9月

独連邦共和国ユーリッヒ(原子核)研究センター 固体物理学研究所 研究員

昭和55年12月

大阪市立大学理学研究科博士課程(理学博士)

昭和61年10月 本学物性研究所助教授

所属：極限環境物性研究部門

専門分野：物性物理学、低温物理学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・ Minoru Kubota, Nobutaka Shimizu, Yoshinori Yasuta, Akira Kitamura, Masahiko Yagi. "Transition into the Supersolid (SS) State, Supersolid Density ρ_{ss} and the Critical Velocity V_c to Destroy the SS State." *Journal of Low Temperature Physics* 162 (2011): 483-491

八木 健彦 教授

(本学在職期間：昭和53年12月～昭和59年7月、昭和61年5月～平成24年3月)



昭和46年3月
北海道大学理学部物理学卒業
昭和51年3月
本学理学系研究科地球物理学専攻博士課程修了(理学博士)
昭和53年12月
本学物性研究所助手

昭和59年8月 東北大学金属材料研究所助教授

昭和61年5月 本学物性研究所助教授

平成9年9月 本学物性研究所教授

平成20年4月～平成23年3月 本学物性研究所副所長

所属：極限環境物性研究部門 新物質科学研究部門 理学系研究科地球惑星科学専攻

専門分野：高圧地球惑星科学、高圧物性科学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・ 八木健彦『超高圧の世界』岩波書店, 2002年.

・ Takehiko Yagi. Review of Experimental Studies on

Mantle Phase Transitions, in "Post-perovskite: The Last Mantle Phase Transition" AGU monograph, 2007: 9-18.

大気海洋研究所

徳山 英一 教授

(本学在職期間 昭和50年12月～平成24年3月)



昭和47年3月
本学理学部地質学科卒業
昭和49年3月
本学大学院理学系研究科地質学専攻修士課程修了
昭和50年11月
本学大学院理学系研究科地質学専門博士課程中退
昭和50年12月
本学海洋研究所助手

昭和58年12月 理学博士 (東京大学)
平成8年11月 本学海洋研究所助教授
平成12年2月 本学海洋研究所教授
平成22年4月 本学大気海洋研究所教授
所属：海洋地球システム研究系海洋底科学部門海洋底地質学分野

専門分野：海洋底ダイナミクス、海洋底資源学
研究内容 (代表的な著書・論文等)：
・徳山英一, 芦寿一郎, 倉本真一, 徐 垣, 池田安隆『東海沖の活断層』, 東京大学出版会, 1-178, 1999.
・Hidekazu Tokuyama, Hideo Kagami and Noriyuki Nasu, "Marine Geology and Subcrustal Structure of the Shikoku Basin and Daito Ridges Region in the Northern Philippine Sea." Bull. Ocean Res. Inst., Univ. Tokyo, n. 22, (1986): 1-169.

西田 睦 教授

(本学在職期間：平成11年4月～平成24年3月)



昭和47年3月
京都大学農学部水産学科卒業
昭和49年3月
京都大学大学院農学研究科水産学専攻修士課程修了
昭和52年3月
京都大学大学院農学研究科水産学専攻博士課程単位取得退学

昭和55年4月 琉球大学理学部助手
昭和58年9月 農学博士 (京都大学)
平成3年6月
カリフォルニア大学バークレー校客員研究員
平成4年4月 琉球大学理学部講師
平成5年4月 福井県立大学生物資源学部助教授
平成8年4月 福井県立大学生物資源学部教授

平成11年4月 本学海洋研究所教授
平成19年4月～平成22年3月 本学海洋研究所所長
平成22年4月 本学大気海洋研究所教授
平成22年4月～平成23年3月 本学大気海洋研究所所長
所属：海洋生命システム研究系海洋生命科学部門分子海洋生物学分野

専門分野：分子海洋生物学、分子進化生物学
研究内容 (代表的な著書・論文等)：
・Speciation in the open ocean. Nature, 389, 803-804, 1997. (共著)
・西田睦『海洋の生命史—生命は海でどのように進化したか』, 東海大学出版会, 2009. (編著)

先端科学技術研究センター

小宮山 眞 教授

(本学在職期間：昭和54年4月～昭和62年7月、平成3年4月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部工業化学科卒業
昭和50年3月
本学大学院工学系研究科工業化学専門課程博士課程修了
昭和54年4月
本学工学部助手
昭和62年7月
筑波大学物質工学系助教授

平成3年4月 本学工学部教授
平成12年4月 本学先端科学技術研究センター教授
所属：生命反応化学分野
専門分野：生命化学、高分子化学
研究内容 (代表的な著書・論文等)：
・Myron L. Bender and Makoto Komiyama, Cyclodextrin Chemistry. Springer-Verlag, Berlin 1978.
・Makoto Komiyama, Yuichiro Aiba, Yoichi Yamamoto, and Jun Sumaoka, "Artificial restriction DNA cutter for site-selective scission of double-stranded DNA with tunable scission-site and specificity" *Nature Protocols* 3, no.4 (2008): 655-662.

御厨 貴 教授

(本学在職期間：昭和50年4月～昭和53年9月、平成15年10月～平成24年3月)



昭和50年3月
本学法学部卒業
昭和50年4月
本学法学部助手
昭和53年10月
東京都立大学法学部助教授
昭和63年10月
東京都立大学法学部教授

平成11年4月

政策研究大学院大学教授

平成15年10月 本学先端経済工学研究センター教授

平成16年4月 本学先端科学技術研究センター教授

平成22年5月 学術博士(東京大学)

所属：情報文化社会分野

専門分野：政治史、オーラル・ヒストリー、公共政策
建築と政治、メディアと政治

研究内容(代表的な著書・論文等)：

御厨貴『明治国家をつくる』藤原書店, 2007年.

御厨貴『権力の館を歩く』, 毎日新聞社, 2010年.

宮野 健次郎 教授

(本学在職期間：昭和63年10月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学工学部物理工学科卒業
昭和49年10月
ノースウェスタン大学大学院物理学科博士課程修了
昭和51年7月
アルゴンヌ国立研究所助手
昭和56年2月
アルゴンヌ国立研究所準教授

昭和58年10月 東北大学電気通信研究所助教授

昭和63年10月 本学工学部物理工学科助教授

平成3年3月

本学大学院工学系研究科物理工学専攻教授

平成13年4月 本学先端科学技術研究センター教授

平成19年4月～平成22年3月

先端科学技術研究センター所長

所属：フォトンクス材料分野

専門分野：物性物理実験、特に光物性

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・ Kenjiro Miyano et al., "Photoduced Insulator-to-Metal Transition in a Perovskite Manganite", *Physical Review Letters* 78, (1997): 4257-4260.

・ 宮野健次郎(共著)「量子コンピュータ入門」日本評論社, 2008年.

生物生産工学研究センター

山根 久和 教授

(本学在職期間：昭和49年11月～平成24年3月)



昭和45年3月
本学農学部農芸化学科卒業
昭和47年3月
本学大学院農学系研究科農芸化学専攻修士課程修了
昭和49年10月
本学大学院農学系研究科農芸化学専攻博士課程中退

昭和49年11月 本学農学部助手

平成5年7月

本学生物生産工学研究センター助教授

平成10年11月

本学生物生産工学研究センター教授

所属：生物生産工学研究センター 環境保全工学部門

専門分野：生物有機化学

研究内容(代表的な著書・論文等)：

・ 山根久和(分担執筆)植物ホルモンハンドブック [上][下]、高橋信孝、増田芳雄 編、培風館、1994年.

・ Yamane H, Konno K, Sabelis M, Takabayashi J, Sassa T, and Oikawa H "Chemical Defense and Toxins of Plants". In "Comprehensive Natural Products Chemistry II Chemistry and Biology": Mander, LN, Luis H.-W., Eds.; Elsevier: Oxford, 2010; Vol. 4, pp. 339-385.

農学生命科学研究科・農学部国際交流室では毎年留学生に関連する様々な行事を行っている。

弥生インターナショナルデイは、留学生と日本人学生、研究員、教職員の交流を深める目的で行っており、今年7月29日（金）に開催された。ベトナム、中国、インドネシア、フィリピン、韓国、ミャンマー、日本の10組の発表者がパワーポイントや踊り、歌などを通じて各国の特徴を英語で紹介した。中国の笛フルス、韓国の笛、インドネシアの楽器アングロン、日本のリコーダーで母国の音楽が演奏された。遠く離れた国々、世界中の人々を繋ぐ文化・伝統の共通点を感じるひとときだった。

発表後は懇親会が行われ、留学生や日本人学生、研究員、教職員、ボランティア等総勢約100名が出席した。美味しい料理を味わいながら、他研究室の学生や教員と話せる貴重な機会を皆楽しんでいった。



YID-2011の発表者などの集合写真

見学旅行の第1回目は10月21日（金）に開催され、学生、教職員合わせて43名が参加した。最初に訪れた国会議事堂では、多くの留学生が初めて議事堂内に入り、英語の説明を聴きながら、国会で使う速記文字や、傍聴席のステンドグラス、美しい壁の彫刻を見学した。



見学旅行第1回：国会議事堂前集合写真

その後、東京湾を船で遊覧しながら昼食をとった。船

内の一室を貸し切ったビュッフェランチで、外の景色を見ながら談笑して時間を過ごした。それから染物体験のため、富田染工芸を訪れた。古い木造の日本家屋で、職人の指導を受けながら、慎重に型付けの体験をした。一週間後に送られてきた反物には、朱色に染められた生地に繊細で、美しい小紋が映し出されていた。留学生は自作の染物を嬉しそうに受け取り、見学旅行の良い土産になったようだった。

第2回目の見学旅行は11月29日（火）に群馬県へ行った。参加者は36名で、最初にこけしの絵付け体験をした。職人の説明を聞きながら皆集中して描いていた。絵付けしたこけしはどれも鮮やかな色遣いと個性あふれるデザインが素晴しかった。

午後は吹割の滝へ行った。都心とは違う自然豊かな環境と滝の流れの勢いを感じながら留学生のはのびのびと楽しんでいった。



見学旅行第2回：吹割の滝前集合写真

数日後、工房で最終仕上げを施されたこけしが送られてきた。ニスが塗られ、絵付けした色がはっきりし、木肌はつややかになっていた。絵付け体験はとて好評で、こけしを手にした留学生の嬉々とした表情が印象的だった。

宇宙線研究所は、1月20日（金）と28日（土）に大型低温重力波望遠鏡坑道掘削工事の着工を記念して一連の記念行事を挙

行した。大型低温重力波望遠鏡は、文部科学省の最先端研究基盤事業で建設が認められた大型プロジェクトで、スーパーカミオカンデが所在する岐阜県飛騨市の神岡鉱山内に、直行する一辺3 kmに及ぶ巨大なレーザー干渉計を設置し、アインシュタインが予言したがまだ観測されていない重力波の直接観測を行う装置である。

20日には、建設予定地近くにある神岡町北部会館において、施工者である鹿島建設(株)による安全祈願祭と宇宙線研究所主催の着工式が開催され、着工式では発注者を代表して梶田隆章宇宙線研究所長の挨拶ののち、来賓として文部科学省学術振興局澤川和宏学術機関課長、古田肇岐阜県知事、井上久則岐阜県飛騨市長から、プロジェクトの成果を期待する祝辞が述べられた。

着工式に続いて場所を富山市内に移し多くの関係機関・関連企業の方々のご来席のもと祝賀会が開催され、前田正史理事・副学長のあいさつに続き、来賓として森下真次岐阜県飛騨市議会議長からご祝辞をいただいた後、このプロジェクトを共同で推進している高エネルギー加速器研究機構の鈴木厚人機構長、自然科学研究機構の佐藤勝彦機構長からスピーチをいただいた。また、この式典のために来日したアメリカの重力波観測実験LIGO共同実験代表のGabriela Gonzalez教授からのスピーチと欧州の重力波観測実験VIRGO共同実験代表者3名からのビデオレターなどが披露され、祝賀会は和やかに行われた。

翌週28日には、柏キャンパス柏図書館メディアホールにおいて、着工記念一般講演会及び大型低温重力波望遠鏡の「愛称」公表式が行われた。

一般講演会では、松本洋一郎理事・副学長の祝辞に続き、川村静児宇宙線研究所教授と柴田大京都大学基礎物理学研究所教授による講演が行われ、多くの一般参加者が熱心に聞き入っていた。

一般講演会に続き、一昨年に全国から募集を行った大型低温重力波望遠鏡の愛称を公表する「愛称公表式」が行われた。

この愛称は、作家の小川洋子さんが毎日新聞に寄せられたコラム「早くこの望遠鏡にもふさわしい名前をつけてあげてほしいと願う」とのメッセージをきっかけに、小川さんを委員長とする命名委員会によって、全国から666件寄せられた応募の中から「かぐら (KAGRA)」という愛称を決定したものである。

かぐら (KAGRA) の「か (KA)」は建設地である「神岡」の頭文字と「ぐら (GRA)」は重力波であるGravitational Waveの頭のGraを合わせたものとなっている。

愛称公表式では、4人の命名者に記念品が贈呈され、江川雅子理事から祝辞があった。

その後、柏キャンパス内のレストランで祝賀会が開催され、磯田文雄理事の祝辞など、盛会裏に終了した。



着工式で挨拶する梶田隆章宇宙線研究所長



祝辞を賜った澤川和宏文部科学省研究振興局学術機関課長



愛称「KAGRA」の発表シーンと小川洋子命名委員長

生産技術研究所

「第9回東京大学学生発明コンテスト」表彰式行われる!

部局

1月25日(水)に第9回東京大学学生発明コンテスト表彰式が生産技術研究所でとり行われた。本コンテストは生産技術研究所、産学連携本部、(財)生産技術研究奨励会の共催で行われ、学生の発明や知的財産権に対する理解を深めることを目的に2003年から毎年開催されているものである。本コンテストは、分野を問わない一般部門と、与えられた課題に沿った課題部門に分かれてい

る。本年度の課題は「『ものづくり』に役立つ発明」であった。今回は工学系研究科、学際情報学府、人文社会系研究科、新領域創成科学研究科から合計11件の応募があり、日用品に関係した発明、科学研究の成果に近いもの、新しいビジネスモデルの提案など、多様な作品が含まれていた。この中から9件が書類審査により選ばれ、12月22日（木）の本審査に進んだ。

本審査では各人が工夫されたプレゼンテーションを披露し、甲乙つけがたい中、下河有司さん（工学系研究科物理工学専攻博士課程1年）の「電場を用いた非接触皮張り検出装置」が見事発明大賞を受賞した。下河さんの発明は、ソフトマテリアルの表面物性測定という純粋に科学的見地から始まった研究が「皮張り」という塗料や印刷などの工業分野における重要な現象に応用できることを示したもので、その独創的な発想が高く評価された。産学連携本部長賞には、細谷勇斗さん（学際情報学府修士課程2年）の「Bluetooth制御機構内蔵模型用互換アクチュエーター」が、簡単にリモコンを楽しみたいという素朴な欲求をビジネスモデルにまで展開した点が評価され、選ばれた。生産技術研究所長賞には、朴鍾湓さん（工学系研究科精密工学専攻博士課程3年）の「凹面上のマイクロパターニングを用いたロールツーロールプロセス用のロータースタンプの制作」が選ばれた。また、温文さん（人文社会系研究科基礎文化専攻博士課程3年）の「白杖の進行方向記録・確認装置」にアイデア賞が授与された。この他、奨励賞が、李蒼さん（工学系研究科都市工学専攻博士課程1年）、山田啓己さん（工学系研究科先端学際工学専攻博士課程3年）に授与された。

表彰式では、受賞者が喜びを新たにするとともに、各人から発明に至った経緯や知的財産に対する思いなどが述べられた。本コンテストは、学生への知財教育の観点で重要な役割を果たしてきたが、今後は、国立大学法人における職務関連発明の届け出義務等を考慮して、どのようなコンテストの実施形態が最善かを検討していく。但し、来年度は今回と同様な形でコンテストが実施される予定である。

上位3賞に豪華副賞をご提供頂いた（株）ニコン様はこの場を借りて厚く御礼申し上げます。本コンテストの詳細は、発明コンテストのホームページ（<http://hatsumei.iis.u-tokyo.ac.jp/>）に掲載されている。



受賞者との記念写真

大学院教育学研究科・教育学部
教育学部附属中等教育学校で日本双生児研究学会第26回学術講演会が開催される

1月28日（土）、教育学部附属中等教育学校（以下、附属学校）において「日本双生児研究学会 第26回学術講演会」が開催された。附属学校にはこれまで912組の双生児が入学し、2011年度は全校で64組が在籍しており、現在、創立以来蓄積してきている各種のデータの電子化を進めている。

学術講演会では、『ふたごの学校』の特色を出すべく、特別企画として総合文化研究科酒井邦嘉准教授による「脳から見た言語の発達」と題した講演、在校生の双子3組、卒業生の双子2組を招いての「東大附属のふたごたち」と題したシンポジウムが行われた。

酒井准教授は、平成12年度から附属学校双生児研究委員会との共同研究を行うため校内組織である同委員会に参加されるなど、附属学校の双生児研究と深く関わっている。講演内容も附属学校の双生児たちを対象としたMRI検査の成果をもとに、「Science」に掲載された言語習得についての研究成果も交えた、双生児の保護者などにも分かりやすい講演であった。

またその後のシンポジウムでは、在校生・卒業生に、双子でよかったことや嫌だったことなどの率直な思いを語ってもらった。卒業生の一人である三橋俊夫前附属学校副校長は、ご自身が学校に通っていた頃の話やされるなど、本校ならではの特別企画となった。

その後の総会では、附属学校の福島昌子教諭が日本双生児研究学会奨励賞を受賞したことを受けて表彰式および受賞講演が行われた。受賞講演は「教師としてのわたしとふたごたち」と題した、福島教諭自身の教師生活とふたごたちとの出会い、そして研究生活と研究報告という幅広い内容であった。

その後会場を二つに分けて、医学的視点や社会的視点、心理学的視点など多岐の領域にわたる15演題の発表が行われ、活発な議論がなされた。それぞれが双生児研究を通じた新しい世界を切り拓く研究であり、今後の様々な

分野に影響を及ぼすことが期待される学術講演会となった。



学術講演の様子



発表する双生児たち

大学院新領域創成科学研究科

第10回新領域創成科学研究科「市民講座」開催

「海洋の再生可能エネルギーの開発」

今年度最終回となる「市民講座」が2月5日(日)14時より雪残る柏キャンパスにて開催された。今回は現在注目されている海洋の再生可能エネルギーの開発について新領域創成科学研究科海洋技術環境学専攻の鈴木英之教授が講演した。

海の再生可能エネルギーの概要から始まった講演において「すべては太陽から」という説明は意外で、地球上でのすべての生物活動がいに太陽から多くの恩恵を受けているかを再認識することとなった。もとをたどれば太陽エネルギーによってアマゾン川の500倍もの水量になる海流である黒潮が作られ、多くの海洋生物がその流れに乗って地球を回遊し、また海の上下方向には1000年かけて1周する流れがあるという。

ご存じのように日本国土は非常に狭く、国別でも第60位の広さであるが、領海(12海里)や排他的経済水域(200

海里)を入れるとカナダに次ぐ世界第6位(448万km²)となる海洋王国だという。その日本が海洋における再生可能エネルギーに関する研究開発で、世界をリードすべき立場にあることは明らかで、それがヨーロッパなどに遅れを取っている現状は、今後多くの改善が期待されるところだ。

海洋関連の再生可能エネルギーの中でかなりの規模の発電量が期待されるのは風力エネルギーだそうだ。分類としては陸上風力エネルギーと洋上風力エネルギーがあり、岸から40km以内へ設置できる風車で換算すると、57000万kW程度の資源量があり、陸上の190倍、大型火力発電所1基が100万kWの発電と考えるとその大規模さが理解できる。また、波エネルギーの利用は欧米で非常に注目されているが、残念ながら日本周辺で条件の良いところは限られるようである。他にも海流エネルギーや潮流エネルギー利用等も検討されているが、やはり洋上風力エネルギーは期待の星と言えそうだ。

最近話題の地球温暖化問題においても海の役割は大きい。人間の排出したCO₂は一時的に大気に蓄積されるが最終的には海に吸収される。海に吸収される過程が緩やかなため、一時的に大気中のCO₂量が増えて地球全体を暖めてしまう。1997年に調印された京都議定書の後も、2020年までの目標が議論されているが、先進国と発展途上国、あるいは先進国間でもかなりの温度差があり、地球規模の問題に地球全体各国一丸となって対策を講じる形になっていないのは残念である。ここでも海洋がCO₂削減に、より積極的にかかわることも今後検討されるべき課題かもしれないとのことだった。

夢多い海洋発電であるが、他の化石燃料や原子力に比べて問題点もある。エネルギー供給が変動的であり安定的供給の面から課題も多い。また、発電装置を作るときに排出するCO₂量、ライフサイクルでのエネルギー収支、経済性など実用化に向けたハードルも低くないようである。しかし、日本以外の国、特に欧米は2000年以降、技術の実用化にかなり力を注いでおり、日本は研究開発段階では世界的にもかなり高いレベルにあるにも関わらず、実用段階への歩みでは出遅れてしまった。この状況は別に海洋エネルギーに係る実用化に限ったことではなく、多くの研究開発が実用化の段階で世界に逆転される場合を多々経験してきている。我々研究者も問題意識をしっかりと持つべき点であろうと鈴木教授は語った。

ブラジルでは最近、海洋油田が発見されるなど、海洋が注目されている。海洋に関する構造物技術は日本においても歴史はかなり古く、実用的な段階まで間違いなく来ている。それらを有効利用して、現在の技術では少々コスト高になったとしても、資源のない海洋大国日本としては、本腰で海洋再生エネルギーの実用化に向けたステップへ一歩踏み出す時が確実に来ていると言えそうだ。



熱の入った講演をする鈴木英之教授



聞き入る参加した市民

大学院農学生命科学研究科・農学部、分子細胞生物学研究所
 生命科学総合研究棟B 竣工記念式典
 を開催

大学院農学生命科学研究科・農学部と分子細胞生物学研究所は、両部局共同で利用する「生命科学総合研究棟B」の竣工記念式典を、学内外の関係者約80名の出席のもと2月8日（水）に開催した。

竣工記念式典に先立ち同棟の見学会が行われ、参加者は放射性同位元素施設（RI）、人工気象室や研究室等を見学した。また、両部局の各研究室の研究者によるパネルセッションがあり、見学者は各研究者からの説明に、熱心に耳を傾けた。

竣工記念式典は、フードサイエンス棟中島董一郎記念ホールにおいて行われた。長澤寛道農学生命科学研究科長、秋山徹分子細胞生物学研究所長及び濱田純一総長による挨拶の後、清木孝悦文部科学省大臣官房文教施設企画部長が祝辞を述べられた。その後、平井明成施設部長より施設概要説明があった。

また、両部局を代表して、長澤農学生命科学研究科長から本棟の建設にあたり多大なる貢献と協力をいただいた、株式会社西松建設、株式会社朝日工業社、株式会社

中電工、三菱電機株式会社の各代表者に感謝状を贈呈した。

引き続き、フードサイエンス棟エントランスホールで行われた祝賀会では、前田正史理事・副学長の挨拶の後、古谷研農学生命科学研究科副研究科長の乾杯の発声で始まり、建設に関わった4社のそれぞれの代表者からも祝辞をいただいた。会は終始和やかに進行し、盛況のうちに終了した。



濱田総長の挨拶



清木孝悦文部科学省大臣官房文教施設企画部長の祝辞



生命科学総合研究棟B

「第19回教育学部音楽祭」開催される

部局

2月15日（水）17時30分より「第19回教育学部音楽祭」が、本郷キャンパス教育学部棟ラウンジにて開催された。教育学部では年に一度、学生と教職員が出演する音楽祭を開催しており、大学院学生・学部生有志を中心とした準備委員会によって企画運営がなされている。

第19回を迎えた今回は、準備委員長である武藤世良さんの挨拶により開会され、コンテンポラリーダンスのパフォーマンス、クラシックピアノ（ショパン、ラヴェル）、クラシック歌曲（プッチーニ、ドナウディ、モーツァルト）、弦楽四重奏（ハイドン、シューベルト）、バンド演奏（The Beatles、THE BOOM）、ロックパフォーマンス（Queen、オリジナル曲）、ギター弾き語り（フォガティ、ザ・リガニーズ、オリジナル曲）、バンド演奏（荒井由実）、ポップスソング（オフコース、平川地一丁目）、ピアノ・バイオリン・ファゴットによる三重奏（ヴィエニャフスキ、メンデルスゾーン）という全10組による演奏・パフォーマンスがおこなわれた。出演者は学生だけでなく、市川伸一研究科長によるギターと歌、佐藤学教授と佐々木司教授によるバイオリン、新藤浩伸講師によるチェロの腕前も披露され、集まった観客を楽しませていた。市川研究科長より「バラエティに富んだジャンルが集まる音楽祭は教育学部の良い伝統であり、今後も盛り上げて開催を続けていきたい」と閉演の挨拶がされた。その後、参加者・観客による懇親会がおこなわれ、即興の演奏が流れる中、にぎやかに親睦が深められた。



学生と教員による弦楽四重奏



学生たちと市川伸一研究科長によるバンド演奏



ピアノ・バイオリン・ファゴットによる三重奏

「第二回 放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会」が開催される

部局

2月18日（土）13時から安田講堂において、「第二回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会」が開催された。

当日は好天の中、約400名の参加者が来場した。研究報告会は、長澤寛道研究科長の開会の辞から始まり、各研究報告が行われた。

まず、中西友子教授より「農学生命科学研究科全体の取組について」の報告があり、当研究科の震災復興支援に関わる取組について述べられた。次に福島県農林水産部 荒川市郎環境保全農業課長より「農産物に対する放射性物質の影響調査」について報告があり、福島県の取組について述べられた。

続いて、根本圭介教授から「放射性セシウムのイネへの移行（第2報）」について、塩沢昌教授から「水田における土壌から稲への放射性セシウム移行のメカニズムについて」、眞鍋昇教授から「畜産業の復興について：南相馬市警戒区域内における暴露状況」について、渡部終五教授から「魚類筋肉への放射能セシウムの蓄積と水洗による除去」について、高田大輔助教から「果樹における放射性核種の移行と分配について」、山田利博教授

から「演習林における野生キノコの汚染状況」について、
各々の報告が行われた。

最後に長澤研究科長の閉会の挨拶をもって、会は盛況
のうちに終了した。



長澤研究科長による挨拶



研究報告を聞く参加者

史料編纂所

在外日本関係史料をめぐる国際研究 集会および古写真展示会を開催

2月21日（火）、史料編纂所（榎原雅治所長）と日本
学士院（久保正彰院長）の共催による「在外日本関係史
料をめぐる国際研究集会」が開催された。報告者にはボ
ン大学のペーター・パンツァー名誉教授を招き、「ドイツ
とオーストリアの文書館における日独/日墺関係の史
料について」の報告を頂いた。

パンツァー教授は、1861年の日亭条約・1869年の日墺
条約以来のドイツ・オーストリアと日本の歴史的関係を
概観し、現地の代表的な文書館（アーカイヴズ）とそこ
に所蔵される日本関係史料について紹介した。さらに、
箱石大准教授（史料編纂所）との共同研究によって新た
に見出したプロイセン史料のトピックスに触れ、箱石准
教授からも補足説明があった。ここでは、戊辰戦争期、
フォン・ブランツ公使が会津・庄内両藩と結んで蝦夷地
に根拠地を獲得することを提案し、この提案を一旦却下
した宰相ビスマルクだったが、他の列強が日本で利権を

得ようとしているとの情報に接し、急遽その実行を命じ
たという史料の存在が明らかにされた。会場内にはどよ
めきがわいたが、ビスマルクの訓令が届いた時には戦争
は終結しており、事なきを得たということである。パン
ツァー教授は2時間を超えて熱弁をふるい、ドイツ語圏
における日本関係史料調査の重要さと課題の大きさにつ
いて強調した。

続けて、パンツァー教授監修のもとに今年度ドイツ・
マンハイム市で開催された「遠来の友/日独修好150周
年記念展覧会」について、宮田奈々氏（ボン大学）から
報告をうけた。多くの史料画像が紹介されたが、とくに
ドイツ人女性と結婚した青木周蔵に関する史料群は今回
初めて公開され、参加者の興味をひいた。研究集会の参
加者は80名を超え、盛会であった。

この研究集会にあわせて、史料編纂所では古写真展示
会「オーストリアの写真家モーザー・コレクション展—
ガラスネガから復元する明治初期の日本—」（2月20・
21日の両日）を開催した。1869年、オーストリア・ハン
ガリー帝国の使節団とともに来日したミヒャエル・モー
ザーは、そのまま日本に残って英字新聞ザ・ファー・
イーストのカメラマンとして日本の風景を撮影したり、
日本人写真家のガラスネガを購入して、多くのコレク
ションを本国へ持ち帰ったりした。史料編纂所の古写真
研究プロジェクト（代表：保谷徹教授）では、今回招聘
したパンツァー教授らの協力を得て、3回の調査を実行
し、湿板写真のガラスネガ140枚ほどをデジタル撮影で
収集した。湿板写真のネガがもつ解像度はすばらしく、
展示会では撮影画像を反転させて引き伸ばすことによ
り、明治初年の日本の風景を鮮やかに蘇らせた。史料編
纂所の展示ホール・ロビーなどを用いた展示会には、2
日間でおおよそ420名の来場者があり、140年前の写真とは
思えない鮮明な画像に感嘆の声をあげていた。



ボン大学パンツァー名誉教授の報告



古写真展示会の様子



意見交換の様子

情報基盤センター

部局

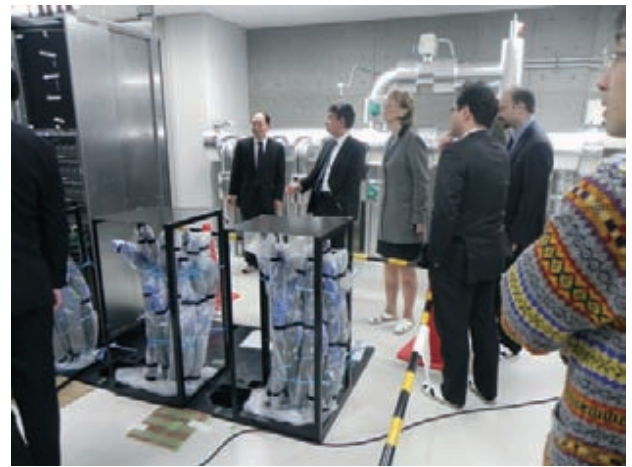
ローレンス・リバモア国立研究所副 所長が情報基盤センターを訪問

我が国におけるHPC（high performance computing：高性能計算）事情視察のために来日中の米国ローレンス・リバモア国立研究所（Lawrence Livermore National Laboratory 以下LLNL）の副所長が、2月23日（木）に情報基盤センター柏キャンパス第2総合研究棟を訪問した。当センターから石川裕センター長や中島研吾教授（スーパーコンピューティング研究部門長）、片桐孝洋准教授らに対応し、情報基盤センターにおけるスーパーコンピュータ導入の現状、研究活動紹介、情報交換・意見交換、施設見学を実施した。

LLNLは米国エネルギー省配下の国立研究所としてHPC分野では最も活動的な研究所の一つであり、ASCI White、Blue Gene/Lなどのスーパーコンピュータを導入・稼働した実績がある。現在はSequoia（ピーク性能20 PFLOPS級、IBM Blue Gene/Qベース）の導入を進めている。またマルチグリッド法を中心とした大規模並列計算機向け数値アルゴリズムの研究開発においても世界をリードしている。

LLNLは様々な研究機関との共同研究の他、最近是企业へのスーパーコンピュータ利用も開始したこともあり、当センターにおける企业利用への取り組みについて熱心な質疑があった。また当センターにおけるアメリカを中心とした国際的な研究協力活動についても様々な議論を行った。

当センターとLLNLはこれまで組織的な交流が無かったが、今後は情報交換・意見交換を積極的に実施していくことをお互い確認した。



4月稼働予定の新スーパーコンピュータ見学の様子

プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム 《実践編》 #01

新連載!

3.11の東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害から1年が経ちました。この1年間、東京大学では様々な形で救援・復興支援を行ってきました。そして、総長メッセージ「生きる。ともに」に表れているよう、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動していく覚悟でいます。この新連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

第1回目は、部局一丸となって被災地における放射能の農畜水産物等への影響を調査、回復に向けた研究に取り組んでいる農学生命科学研究科の取組みについて、プロジェクトのサブリーダーでいらっしゃる中西先生にお話を伺いました。

プロジェクト名： 被災地の農林水産・畜産・漁業の支援・復興

広報課 放射能の農畜水産物等への影響についての調査・回復研究を研究科全体で取り組んでいます。きっかけはどのようなものだったのでしょうか？

中西 震災、原発事故後に、長澤研究科長のリーダーシップの下、被災した農業の現場で役立つ研究計画を募ったところ、40~50件の提案が集まりました。そこで、各提案をまとめ、穀物、畜産物、魚介類などの分野ごとにグループを作り、農学部の牧場（茨城県笠間市）、農場（西東京市）などの施設、さらに以前から連携があった福島県農業総合センターなどをフィールドとして、調査研究を始めました。農学部全体で分野を超えて1つのプロジェクトに大勢で取り組むということは、初めての試みです。

広報課 プロジェクトはいつから開始されたのですか？

中西 4月には被災地に赴き、調査を始めました。当初は、被ばくの恐れから学生が現地へ行くことを禁止し、教員のみが現場へ行き測定していました。研究科長の裁量で旅費だけは農学部から出しましたが、すべて手弁当でのスタートでした。全員が被災地の農業復興のために科学者としてできることをしなければ、という強い使命感を持ち、取り組んできたところです。

広報課 プロジェクトとしての成果が出ていると聞きます。

中西 はい。4月、5月に得られた最

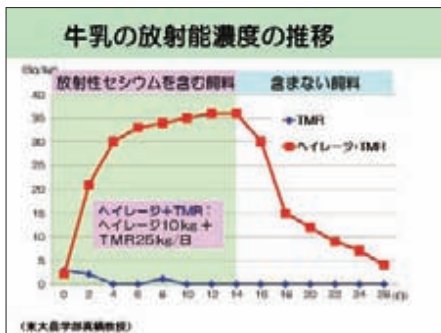
初の研究成果は論文としてまとめ、「Radioisotopes」（日本アイソトープ協会）8月号に掲載されました。これらの論文では①土壌および野菜の放射能濃度（大下誠一教授ら）、②牛の乳の放射能濃度（眞鍋昇教授ら）③水田・畑作土壌からの放射性セシウムとヨウ素の溶出実験（野川憲夫助教ら）④水田土壌における放射性セシウムの深度別濃度と移流速度（塩沢昌教授、根本圭介教授ら）⑤コムギ中の放射性セシウムのイメージングと定量（田野井准教授ら）という幅広い分野での成果をまとめることができました。その他にも、野鳥を調べているグループ（石田健准教授）、魚介類を調べているグループ（渡部終五教授）なども活動中です。牧場では、安全な牛乳を生産できる方法を示すために、放射性物質で汚染された牧草で乳牛を2週間飼育した場合の牛乳中の放射性物質の混入を調べたところ、牧草の給与を止めた後2週間程度で含有量が激変するといった結果が出ています（【図】）。被災地における土壌・水質・農畜漁産物の汚染問題についての具体的な科学的知見が出てきています。いずれも単一の専門だけでは解明ができない問題ですので、農学部全体で取り組む強みが発揮できます。

広報課 2月には「稲の試験作付推奨」に関する提言を出したり、2回目の報告会も開催されました。

中西 農林水産省が、国の暫定規制値の1キログラム当たり500ベクレルを超えた場合には、旧市町村単位で地区全体の作付を制限するという方針を出しました。さらに厳しい制限が出ることも想定されます。このことは、(1)経年変化のモニタリングができなくなり、(2)水田の荒廃や、(3)労働力の劣化等の弊害を招き、当該地域の農業復興を断念させるものだと思っています。福島県伊達市では相当数が該当しています。科学的知見を示すことで現場の農業に提案していきたい。それが、農業復興への第一歩だと考えています。そこで長澤研究科長が提言を出されました。

異分野の研究者が集まって、復興支援に向けて学際的な研究に取り組むことができたことを嬉しく思っています。30年という長い半減期を持つ放射性セシウム汚染を考えると、私達の研究はまだ緒に就いたばかりと言えるでしょう。これからもこのプロジェクトを途切れることなく継続していくつもりです。

農学生命科学研究科の復興支援プロジェクト（取組みの概要、成果、提言等が掲載されています）
<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/rpjt/index.html>



【図】放射性セシウムを含む飼料を食した牛のミルクからは早2日目から放射性セシウムが検出され14日でほぼ一定値となった。そこで次に放射性セシウムを含まない飼料を与えたところ、ミルク中の放射性セシウムの量は徐々に減少し約14日後には元の値に近くなった。



平成24年作付け前に伊達市地域ごとに水田の土壌と刈株を採取しており、放射性セシウムの詳細な動態を調べる予定である。

地震と津波による福島第一原発の事故は大量の放射性物質の飛散という我が国で初めて且つ大規模な災害をもたらしました。特に、農林畜産業に与える影響は甚大です。農学生命科学研究科では、事故直後から放射能汚染の低減策を探るべく、生体内および環境中の放射性物質の動きを中心に専門的立場から調査研究を行ってきました。今後も各分野で継続していきます。



中西 友子 教授
農学生命科学研究科
附属放射性同位元素施設

プロジェクト代表
農学生命科学研究科長 長澤 寛道

一プロジェクトに関する問い合わせ
農学生命科学研究科附属放射性同位元素施設
中西友子 (atomoko@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp)
構成：本部広報課（内線：82032）



このコーナーでは、日々の活動の中で、総長が考えておられることを皆さんにお知らせしていきます

三度目の被災地訪問を終えて

濱田純一

東日本大震災の発生から1年が過ぎました。被災地の状況について、明るいニュースをだいたい聞くようになりましたが、まだ全体としてはなかなか復興が進んでいないという印象を受けます。不自由な避難生活を余儀なくされていらっしゃる方々も、まだまだたくさんおられます。

つい先日、遠野市、大槌町、陸前高田市に出かけてきました。遠野市と大槌町は、昨年4月、9月に続き、3度目の訪問になります。

遠野市へは、「『縁』が結ぶ復興への『絆』」と題する集いへの出席が、主な目的でした。遠野市は内陸部にありますが、大震災発生以来、大槌や釜石、陸前高田など沿岸地域への「後方支援拠点」として自らを位置付けて、自衛隊や多くの自治体、さらに大学や団体などが、遠野市を足場として、さまざまな支援活動を行ってきました。東京大学も、この遠野に、救援・復興支援室の分室と宿泊も可能なセンター施設を置かせていただいています。

この集いは、遠野市が、遠野の後方支援活動を支えてくれた自治体や団体などに感謝を表す場ということで企画されたものですが、正直なと

ころ、こちらから遠野市の皆さんにお礼を申し上げるべき筋合いのものと思っています。この集いの中で、私も、「人の絆、組織の絆『絆』を明日へ」というテーマで講演をさせていただきましたのですが、そこでも、遠野市長をはじめ市役所の皆さん、また遠野市の皆さんへの深い感謝を述べずにはいられませんでした。

この講演の内容は、震災後に出来た絆を、人の絆と組織の絆を組み合わせながら、被災地の復興まで息長く持続させていこう、という趣旨のものでした。講演の全文は、http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_20120321_j.htmlに掲載されています。

この集いの翌日に、大槌町の仮庁舎を訪れ、「震災復旧及び復興に向けた連携・協力に関する協定」を結ぶことができました。ご承知のように、大槌町では、被災した大気海洋研究所附属の国際沿岸海洋研究センターの再建への取組みが進んでいますが、震災後、保健師の皆さんが全戸家庭訪問して行った健康調査や、海底の状況の調査、町の復興計画についての支援など、東京大学の教員たちが参加して活動を行ってきました。町

の復興計画への関わりでは、町と住民との協議の場に東京大学の教員がアドバイザーとして入り、建設的な議論となるよう奮闘するなど、どのプロジェクトでも、皆さんがいわば「身体を張って」ボランティアをなさってきた姿勢を強く感じました。この協定を結ぶことによって、東京大学としては、大槌町の復興のためにさらに幅広い面にわたって、息長く支援を続けていく体制を整えたこととなります。ここで、東京大学が町や住民の皆さんを支援しながら出来あがっていく町づくりが、他の被災地域の復興にとってのモデルともなればと願っています。

遠野市にうかがう前に、陸前高田市に初めて立寄りしました。ここでは、学習支援のボランティアの学生たちが、3か所の学校に分かれて活動を行っていました。週末とんぼ帰りの厳しい日程のようですが、生徒の皆さんととてもうまくコミュニケーションをしていたのが心に残りました。生徒の皆さんにも、学生たちにも、きっと、長く記憶に残る日々になることと思います。



3月18日(日)、濱田総長は遠野市主催「東日本大震災・後方支援の集い～『縁』が結ぶ復興への『絆』～」に出席し、市民・関係者で埋めつくされた遠野市市民センター大ホールにて、「人の絆、組織の絆『絆』を明日へ」と題した基調講演を行いました。また、支援団体の1つとして、本学の支援活動に対して遠野市から感謝の楯が贈呈されました。翌19日(月)には、大槌町役場仮庁舎にて、碓川豊大槌町町長と濱田純一本学総長による「震災復旧及び復興に向けた連携・協力に関する協定書」(東大と大槌の協定)の調印式が執り行われました。



ひょうたん島通信

大槌発!

第3回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱（ほうらい）島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から毎月、沿岸センターと大槌町の復興の様子をお届けします。

沿岸海洋観測の再開

田中 潔（大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター准教授）

わたしは、2011年9月に国際沿岸海洋研究センターに着任しました。海洋物理学を専門とし、海洋の流れやその変動のメカニズムを調べています。

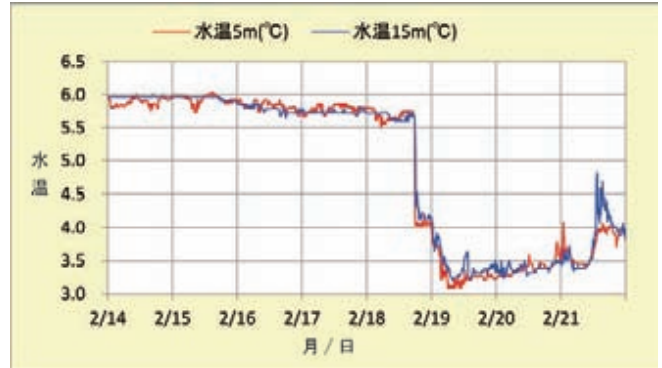
大槌では現在、海洋観測システムの復旧を急ピッチで進めています。そのひとつに、大槌湾の水温モニター（定点での時間的に連続な水温観測）があります。センターでは震災前から大槌湾で、湾内の海水循環の実態（大槌湾の海水が「いつ」、「どこから」来て、「どのようにして」流れているのか）を明らかにするために、ひょうたん島（蓬莱島）近くで水温モニターをしていました。震災でそれらの観測装置は流出・消失してしまいましたが、観測装置を再設置して2011年9月より水温モニターを再開しています。

現在は水深25mの場所で、水温を深さ方向に約5mの間隔で観測しています。観測装置の電力は太陽電池でまかない、観測したデータを1日3回、携帯電話回線を通して陸上へ送っています。

観測装置の仕組みは図に示したとおりで、ソーラーブイから海中に水温計を釣り下げています。海藻などがからみつくため、観測装置はときどき清掃する必要があります。春～秋は1カ月に1度以上、冬は2～3カ月に1度はメンテナンスをします。また、機器が不調になることもあります。きめ細かな手入れが重要ですので技術職員の方々の助力が不可欠です。

この観測によって、つい先日（この原稿を書いているのは2012年2月）、湾外から非常に冷たい海水が湾内に大規模に侵入し、水温が12時間で約3度も低下するという大変貴重な現象をとらえることができました。こうした急激な水温低下は、湾内の水質や海洋生物の生息環境に大変大きな影響を与えます。

今後も引き続き、海洋観測システムの復旧を推進し、これまで以上のシステムを復興・構築する予定です。



2012年2月に観測された大槌湾の海水温の急低下の様子



観測装置のメンテナンス



水温観測装置のしくみ

国際沿岸海洋研究センター専門職員・川辺幸一です。2月から大槌町勤務に戻りました。釜石市から提供を受けた仮設住宅に住み、そこから大槌町中央公民館内にある復興準備室に通っています。

◆そよ風の贈り物 You Give Good Love — 仮設住宅、まさに読んで字のごとし —

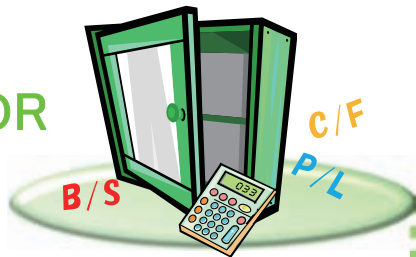
釜石市から提供を受けた仮設住宅は居間が5畳ほどの単身用ワンルーム。各種マスコミ報道で何となくのイメージはありましたが、実際に住んでみて初めてわかることがたくさんありました。隣室とは薄い壁一枚で仕切られているだけ。窓はたった一つでそのカーテンを開ければ、目の前は人が行き交う通り道。神経の細やかな人ならば、このプライバシーのない状態にストレスを感じるかもしれません。居間のほかには小さな台所と小さなユニットバスと小さなトイレがあるだけ。ユニットバスの浴槽では膝を曲げなければならず、追焚き機能もありません。この季節、床下や玄関からは冷気が流

れこみ、暖房器具を利用して部屋はすぐに暖かくなりません。これ以外にも細かい不満をあげればキリがありません。読んで字のごとく、仮設住宅はまさに仮住まいでしかないのです。まだ体力に自信のある自分ですらこれだけの不自由を感じるのですから、お年寄りや小さなお子さんがいる家族、障害をもつ人たちの不便さはどれだけのものなのでしょうか。被災地の現状は見たり聞いたりするだけではわからないことがたくさんあります。機会があればぜひ被災地を訪れていただければと思います。



決算のDOOR

～数字が語る
東京大学



第18回 毎年返済コツコツ

「ちょっと、聞いている!？」のんびり自宅でコーヒープレイク中の旦那さま。手にした新聞紙を奥さまに取り上げられてしまいました。「あのね、303号室の田中さん、マンション買ったんですって!いいなあ。ねえ、ウチは?」結婚して早10年。最近の奥さまの関心事は専らマイホームです。「う～ん、でも今から30年も借金だろ。宝くじでも当たればねえ」「もう!大体アンタが安月給なのが…」さあ始まったゾ!ソソクサ逃げ出す旦那さま。無理ありません。マイホームはまだまだ高価なお買い物。低金利とはいえ、先行き不透明なこのご時世ではローンにも慎重になります。

さてさて、そんなご家庭はさておき、大小さまざまな建物(およそ1870億円)を有する東京大学にも実はローンで手に入れた建物があります。その中には、国に借金をしたり、分割払いで取得した建物の他に、「PFI」(Private-Finance-Initiative)」という制度を活用した建物もあるのです。

PFIとは民間の資金とノウハウ(経営能力や技術力)を公共事業に活用することで効率的に質の良い公共サービスを提供しようと、平成11年に英国から日本に導入された制度です。一般に大学では、設計、建設、警備や清掃などの維持管理等の契約は個別に行い事業を実施しています。一方、PFIではこれら業務を一括し、大学が求める要求水準書を提示。それぞれの得意分野の業者間でグループを組み、各々のノウハウを最大限活かして全体のマネジメント案を提案します。大学はそこから最も良い提案をしたグループ(契約後はSPCと呼ばれます)と10年から15年の長期契約を締結。建設費用は毎年の維持管理費とあわせて分割払いも可能です。その場合の返済額は、財務諸表上「長期未払金」という負債勘定科目に計上し、年2回コツコツ返済します(只今およそ50億円)。

現在5つあるPFI物件のうち、駒場コミュニケーション・プラザ(通称「コミプラ」)は駒Iキャンパスの学生教職員およそ1万人の福利厚生と教育研究環境の向上を目的として、設計から運営まで一括して委託した建物です。明るく開放的な食堂はメニューも豊富で、学生や教職員はもちろんのこと近隣住民の方の憩いの場として連日大賑わい。SPCの一員である東大生協の担当者によると、本郷の学生さんが羨むほどだとか。PFIはあくまで施設整備の手段。制度に対する専門知識も要求され、民間のノウハウが活かせる事業も限られるため、全ての建物整備に有効とはい切れませんが、少なくともコミプラでは学生さんの笑顔がそこかしこに溢れていました。(青)



コミプラは南館(生協食堂)、北館(生協書籍部、購買部、多目的教室や音楽実習室など)、和館(和室)で構成されています。北館の多目的室ではサークル活動が盛ん。(右はダブルダッチの練習中)

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@m1.adm.u-tokyo.ac.jp

◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取る場合があります。あらかじめご了承ください。一ご意見、ご質問お待ちしております!

インタープリターズ・
バイブル

vol. 56



科学技術インタープリター養成プログラム

社会のなかの科学技術

大島 まり

大学院情報学環 生産技術研究所 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

普段、生活していくうえで、私たちは科学や技術について注意を払うことはほとんどない。私は今、この原稿を出張先で執筆している。電源、パソコンとインターネットアクセスさえあれば、場所に関わらず、原稿を書くことができ、そしてどこからでも即座に送ることができる。また、携帯電話があれば、どこでも話すことができ、必要な情報を瞬時に得ることもできる。便利な世の中になったものである。

一方、東日本大震災後、科学技術に対する信頼が揺らぎ始めている。マグニチュード9.0という大きな地震、それに伴って発生した津波、そして、その後に引き起こされた福島第一原子力発電所事故。私自身、このたびの大震災により、自然の脅威を痛感するとともに、研究者のアウトリーチ活動の推進に携わっている者として、科学技術の社会的な意義について改めて考えさせられた。

科学技術は、経済発展の源である。しかし、環境問題に見られるように、科学技術と社会との共存が求められる現在では、社会が科学技術をどのように捉え、判断し、受容していくか、について考えることが必要になってきている。従来のアウトリーチ活動では、原理や原則、あるいは技術の理解に力点が置かれていて、科学技術の社会的な意義や役割に着目した例はあまり見られない。そこで、東京大学生産技術研究所では、次世代育成オフィス(Office for the Next Generation: ONG)が2011年6月に設置され、産業界と連携して科学技術と社会の結びつきにも注目した出張授業と教材開発の新しい試みを行っている。昨年12月には、車両のメカニズムを題材に取り上げ、東京地下鉄株式会社(東京メトロ)や株式会社ジェイテクトの協賛を得て、須田義大教授が埼玉県立浦和第一女子高校で出張授業を行った。模型を使いながら車両の走行の仕組みなどを説明するとともに、車両産業を支える部品であるベアリングを例に取り上げ、実際のベアリングを見て仕組みを学ぶことにより、産業界の構造や科学技術の社会的役割について触れることのできる出張授業を行った。「ベアリングなんて聞いたことがなかったので、勉強になった」などの感想が見られ、今までにない興味深いアンケート結果が得られた。ONGの詳細については<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/ong/>に記載しているので、興味のある方は是非参照いただきたい。

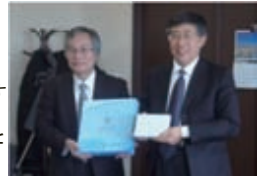
東日本大震災から1年が経過した。科学技術は、社会の隅々にまで浸透しているが、科学技術の理解については、隅々まで浸透しているのだろうか。科学技術と社会を結びつける科学技術コミュニケーションの必要性がますます増しているように思う。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

本学の学生を対象に、起業・事業化を支援する「東京大学アントレプレナー道場」は、自分のアイデアをもとに、どのようにしたら起業できるのか、どうやって事業(ビジネス)に結びつけることができるのかといった、起業・事業化のノウハウを学ぶ場です。今回は、恒例となった北京大学との学生交流の様態と、事業化推進部長の各務茂夫教授がモデレーターを務めたシンポジウム「イノベーション・起業の新たな展開」をご紹介します。

第7期 アントレプレナー道場 北京大学との学生交流@東京大学

記念品を手にする保立産学連携本部部長(左)と关海庭氏



「東京大学アントレプレナー道場」(以下、アントレ道場)のプログラムの一環で、ビジネスプランの最終発表審査会で選ばれた本学チームと、北京大学の選抜チームとの学生交流イベントが、2月15~19日にかけて行われました。2005年からスタートした、このアントレ道場。例年4月にスタートし、10月に行われる学生チームのビジネスプランコンテストで修了する6カ月間のプログラムです。2008年から、自らの事業化の提案を国際的な視点から捉え、ビジネスプランのレベルアップを図ろうと、北京大学との交流プログラムを続けています。

北京大学からは今回、同大学ビジネスプランコンテスト(共青团北京大学委員会主催)参加者から選ばれた3チームの6名と大学関係者7名が来訪しました。来訪団歓迎式典の中で、来訪団団長の北京大学副教務長、关海庭氏は「起業教育に熱心に取り組むなど、両大学には共通点が多い。この交流も4年目に入り、良い効果が出てきた。今後も友好な関係を築いていきたい」と挨拶されました。



昨年11月に、本学チームが北京大学を訪問し、友好関係が築けていることもあり、記念品の交換、記念撮影と、終始、和やかな雰囲気の中で式典が行われました。

両大学の学生によるビジネスプランの発表会では、各3チームがプレゼンテーション。発表後の質疑応答では、文化の違いからくる良い意味での着眼点の新鮮さや鋭い質問などに、ともに考

え、意見を交換し合いながら、ビジネスプラン作成スキルのブラッシュアップが図られました。

また、例年行っている日本のベンチャー企業の見学では、(株)虎の穴とグリー(株)の2社を訪問。店舗の見学をはじめ、実際に経営者や担当者から直接話を聞くことで、多くの成功事例を学び、有意義な交流が図られました。



イノベーション・起業の新たな展開 シンポジウム 開催

各務茂夫教授



経済産業省主催のシンポジウム「イノベーション・起業の新たな展開」が1月25日午後、三田共用会議所講堂で行われました。この会議は、本学産学連携本部が、米国国務省、日本ベンチャー学会、スタンフォード大学、日本貿易振興機構(JETRO)と共に実行委員会メンバーとして協力したものです。産学連携本部事業化推進部長の各務茂夫教授が総合司会をつとめ、また後述のパネル討論にも参加しました。

ジョン・ルース駐日米国大使と牧野聖修経済産業副大臣が起業家やベンチャー・キャピタリスト、ベンチャー支援専門家等300人を超える聴衆を前にシンポジウムの開会挨拶を行いま

した。グリー社の創業者・代表取締役社長である田中良和氏とラルタ・インスティテュートCEOのロヒト・シュクラ氏が、「日米におけるベンチャービジネスの成長促進」をテーマに基調講演。また、「アントレプレナーシップの新潮流」と「ベンチャーキャピタルとアントレプレナーシップのエコシステム」に関するパネル討論も行われました。このパネル討論には、(株)東京大学エッジキャピタル(UTEQ)代表取締役社長の郷治友孝氏、およびUTEQの出資先で、昨年7月に東証マザーズ市場上場をはたした(株)モルフォ代表取締役社長の平賀督基氏もパネリストとして参加しました。本シンポジウムは日米両政府間会議「イノベ

ーション・起業・雇用創出促進のための日米対話」に付随するイベントとして開催されましたが、両国ビジネス界の人と人のつながりを深めることを目的としたものです。

このシンポジウムに先立って同日午前には、「日米イノベーション・アントレプレナーシップ・カウンシル」が設立され、日米の代表者約20名(各務教授を含む)が集い、会議を行いました。将来の繁栄は市場に新技術を送り出すことにかかっていることを共通の認識とし、両国政府はさらなる雇用と経済成長を生み出すために、起業を通じたイノベーションを育成する試みの強化を目標としています。(出所:経済産業省プレスリリースより一部抜粋)

連絡先:産学連携本部(本部産学連携課)
電話:内線22857(外線03-5841-2857)
WEBサイト:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

第1回エネルギー政策ラウンドテーブル グローバル視点で ベースとなる議論を

第1回エネルギー政策ラウンドテーブルは、2月21日、新設された伊藤謝恩ホールにおいて、予想を超える参加者を得て、盛会のうちに行われた。以下、第1回の議論の結末について報告する。

このラウンドテーブルは、いわば「外からの視点」を提供することを目指している。エネルギー分野で世界の議論をリードしている講師を海外から招聘し、講演してもらう。さらにわが国のエネルギーやその関連分野における第一人者が加わって議論を深めるのが狙いである。2-3カ月に1回、年5回程度開催する計画である。

後に引き続き議論のベースともなる第1回には、できるだけ大きくグローバルなエネルギーの構図を提示しうる講師やパネリストの方々をお願いした。様々な現状認識や多岐にわたる課題などを多く提示してもらいたかったからである。

当日は期待通り様々な論点が提示された。(1) エネルギーを巡るグローバルな環境は、前例をみないほど不確実性を増している。地政学的な変化に懸念材料がみられる中、

原油の生産・輸出は多様性が乏しくなり、高価格が継続する見通しとなっている。一方で、非在来型ガスの開発が急速に進んでいる。需要面では、中国をはじめとする新興国のエネルギー需要が急増し、世界全体の需要を引っ張っている。

(2) このような環境変化に伴い、政策的にはエネルギー安全保障に対する関心が高まっている。また、一次エネルギーから電力へのシフト、国境を越えたネットワーク構築の重要性の高まりなど、エネルギー安全保障の概念自体にも見直しが必要となってきている。国際的なガバナンスの観点からは、国際エネルギー機関 (IEA) の有効性や、新たな国際的枠組みに関する議論が始まりつつある。また、エネルギーの輸送などに対する懸念も高まっている。

(3) 原子力は、従来3つのE、すなわち、エネルギー安全保障の確保、地球環境問題への貢献及び経済性の確保のいずれにも大きく貢献してきたが、フクシマ後一部の国において見直しが行われている。原子力からの撤退は、従来原子力に依存しエネルギーの自給率が低い国であるほど、この3つのEのいずれの観点からも厳しい状況に直面することを意味する。

(4) エネルギー安全保障の確保や将来の環境制約等を考慮すると、中長期的観点からは、省エネやクリーンコール、CCS等の低炭素関係、資源開発等の技術開発が重要である。

(5) 将来は中国、インド、ASEANを中心とするアジア地域のエネルギー政策やエネルギー情勢が、そのまま他の世界のエネルギー情勢や3つのEに直接的影響を与える。

(6) 我が国は、福島の実験と教訓を踏まえた新しい安全基準を策定



Dr. Fatih Birol IEA 首席エコノミスト

するとともに、世界に対して福島原子力発電所事故の情報や教訓を国際社会としっかり共有する必要がある。次に国際的トレンドを十分踏まえ、新しい時代の安定した柔軟なエネルギー政策を早急に確立すべきであり、そのためにも、比較可能な形で、透明性のある科学的知見に基づいた政策議論を行うべきである。アジアとの関係では、省エネや低炭素関係の技術や経験を基礎として貢献・協力をを行うことが期待される。

第1回を終えて講師やパネリスト、参加者の方々から、励ましとともに頂いた多くのコメントは、次回以降のラウンドテーブルの運営に反映していきたいと思っている。例えば、多くの参加者の方々から、「もっとしっかりとパネルディスカッションを聞きたかった」との意見を頂いた。これを踏まえて、次回以降、事前の調整をよりしっかり行うと共に、時間も延長する予定である。

第2回はシンガポール国立大学エネルギー研究所のSK Chou 所長を講師に迎え、4月20日(金) 午前に開催する。

(芳川恒志 特任教授)



坂田教授、ミャンマーで講演 経済・社会改革で 当センターに協力要請

本センターの坂田一郎教授は、2月26日から3月3日までミャンマーを訪問し、ミャンマー連邦共和国国家計画経済開発省と国際協力機構 (JICA) との共催による2回のワークショップで基調講演を行いました。

ミャンマーの1人当たりGDPはASEAN最低水準であり、経済の発展段階としても農業従事者が6割を占める農業国にとどまっています。一方、2000年以降、経済制裁下にもかかわらず

天然ガスの輸出が拡大しており、また、恵まれた水資源や農業生産力、勤勉な労働力等に対し世界から注目が集まり、直接投資も急増しつつあります。民主化を掲げる新政権の下、経済・社会の構造改革、自由化に向けた施策が次々と打ち出され、特に、ここ半年間の変化は目覚ましいものがあります。多くの改革法案は議論途上ではありますが、工業大臣、商業大臣との会見でも改革への強い意志が感じられ、急成長前夜の状況にあると感じます。

ワークショップには、日本に派遣された中堅官僚の研修生30名を含め150~200名が集まり、国家計画経済開発大臣、工業大臣、中央銀行副

総裁ほかの政府要人も挨拶や講演をされました。坂田教授は講演の中で、多数の目標間のバランスの重要性、個別政策間のトレードオフや補完性への意識の重要性、新興のSEZや工業地区を核とした地域クラスターの形成方策、急成長するASEAN内のネットワークとの連結の重要性、政策形成や運営に当たって現場に興味を持ち深く知ることの重要性等を指摘しました。

政策ビジョン研究センターは、ジャカルタに本部を置く国際機関の東アジアASEAN経済研究センター (ERIA) から要請を受けて、ミャンマーにおける「エネルギー高度化ロードマップ」の研究・提言作業に着手する予定です。

「日本・アジア学」講義紹介

『アジアでがんを生き延びる』
(地域文化研究特別講義Ⅱ)

Cross-boundary Cancer Studies-越境するがん学-
成長目覚ましいアジアにおいて急増しているがん。

その対策の困難さから、社会に大きな負荷を与えていくと予想されるがんという事象があぶりだす課題を、医学はもとより、政治・外交・経済・文化など様々な領域から捉えて、各分野の第一人者によって、読み解いていく連続講座である。

国際社会において医療はこれまで、安全保障やエネルギーなどの課題にくらべあまり大きなものではなかったが、世界でも未曾有の超高齢化社会に突入する日本が、少し遅れて高齢化社会に入っていくアジア諸国に貢献できることがあるとすれば、それは、がんという難問にどう立ち向かうかという叡智を紡ぐことであろう。限られた医療資源の中、医療格差や、死生観の多様性を乗り越えて、人々が、がんを社会の中でどう捉えて生き延びていけばいいのか。

大学という普遍的な価値を共有し合える機関において、がんというアジアの近未来の難問に応える学術基盤の核を学際的に構築していく意義は大きい。

本講座をきっかけに、海を越えて、日本・韓国・中国で、学際的国際癌連携プログラムを立ち上げ、知的共有基盤形成活動を目指す動きが始まっている。



武見敬三(財)日本国際交流センター シニア・フェロー
(2011.10.17 授業風景)

「保健・医療分野における 先導的成熟国家の役割と課題」という題で人間の安全保障の概念から、アジアのがん医療の未来について講義を行う。

文・写真:河原ノリエ

『アジアでがんを生き延びる』講義は2012年度も開講します。

詳しくは、<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/edu/>

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL:

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

■イベント出店情報★

●4月12日(木) 入学式

今年も日本武道館にてテント出店致します! 例年通り3箇所に出店し、新入生へコミュニケーションセンターを紹介いたします!

UTCCスタッフはお揃いの白いスタッフジャンパーを着てお待ちしております☆日本武道館にお越しの際は是非お声掛け下さい☆

スタッフ一同、気合を入れて入学式を盛り上げていきますので、ぜひテントへも遊びにいらして下さい!!

■大好評です!! 御酒桜ボトル★

前回からお知らせしている、卒業・入学シーズン限定、「御酒桜ボトル」!

年号と、春を感じさせるかわいらしい桜デザインが大好評です!!

卒業・入学の記念に、お世話になった方へのお礼に、これからお世話になる方へのご挨拶にいかがでしょうか?

UTCCの御酒は、できるまでのストーリーも素晴らしいですが(詳しくはUTCCのホームページをご覧ください)、味にも自信があります!!

数量・期間限定となります。この機会にぜひお買い求め下さい!!



右 御酒桜ボトル 4,200円(税込)
左 御酒桜ミニボトル 1,995円(税込)

■新商品ご紹介★

総合研究博物館新図録

「アルケオメトリア」
¥3,675(税込)

3月16日より発売開始!!
博物館を訪れた後は、是非UTCCにお立ち寄り下さい★



担当: UTCC三浦



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN: 月曜~土曜 10:00~18:00

電話: 03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

社会と東京大学との関わりを深めるために



東大オフィシャルネクタイ(レジメンタル)、こだわりの逸品です

昨年7月本部に新設された社会連携部(本部棟5階)の社会連携推進課に勤務しています。社会連携推進課、渉外・基金課、卒業生課の3課で構成される社会連携部は、社会と大学との双方向コミュニケーションの強化を促進するために改組・設置され、ミッションの重大さや仕事のやりがいを真摯に受け止め、日々邁進しています。社会連携推進課は、研究成果をオフィシャルグッズとして販売するコミュニケーションセンターや、この4月にオープンする伊藤国際学術研究センター、オープンキャンパスの運営のほか、「東大EMP」、「公開講座」、「グレーター東大塾」など、より社会に開かれた生涯学習(エクステンション教育)事業も担ってい

ます。また、卒業生とのネットワークづくりの各種プログラム(ホームカミングデー、東大ワールドカフェ、東大プレミアム・サロンほか)など、社会と東大との関わりを深める社会連携部の事業展開には、各部局との連携協力が必要不可欠となります。まずは連絡調整役に重点をおいて、大学としての一元的な窓口機能を果たしたいと思いますので、今後も引き続き部局の皆様のご協力をお願い申し上げます。

一方、私個人の正課外活動では、都内某女子大学サッカー部の監督(12年目)を務め、幾多の敗戦にもめげず週末はサッカーに明け暮れています。なでしこジャパンのように、最後まで諦めず貪欲に挑戦し続けている今日この頃。



サッカー部なでしこ達



根岸部長と社会連携推進課メンバー

得意ワザ：人間鯉のぼり、間接フリーキック、二礼二拍手一礼

自分の性格：アドレナリン系切磋琢磨タイプ

次回執筆者のご指名：安藤昭浩さん

次回執筆者との関係：シュノーケリングゴルフファータイジ仲間

次回執筆者の紹介：世界に誇る「東京大学検見川総合運動場長」又の名を「東大グラウンドホテル支配人」、地域密着型エンターテイメント

■救援・復興支援室の活動(2月～3月)

- ▶2月18日～26日・・・学習支援ボランティア
場所:岩手県陸前高田市「学びの部屋」
A班:2月18・19日/B班:2月25・26日
- ▶2月24日・・・第10回救援・復興支援室会議
- ▶3月3日～18日・・・学習支援ボランティア
場所:岩手県陸前高田市「学びの部屋」
C班:3月3・4日/D班:3月17・18日
- ▶3月19日・・・大槌町と震災復旧及び復興に向けた連携・協力に関する協定締結
- ▶3月21日・・・第11回救援・復興支援室会議

■プロジェクト登録研究 84件 (2012年1月16日現在)
⇒新連載「再生のアカデミズム《実践編》」始まりました。P46参照
■救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/index_j.html
■救援・復興支援室
Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線: 21750

第1話 分室
遠野ものがたり

救援・復興支援室の遠野分室から、被災地の復興の様子や分室の活動を報告していきます。

岩手県遠野市の市役所玄関に、「東京大学」の看板が掲げられたからもうすぐ1年。早いもので、東日本大震災から1年が経過しました。

濱田総長メッセージ「生きる。ともに」の理念の下、5月で開設後1年となる「救援・復興支援室 遠野分室」は、本学の被災地での救援・復興活動に対しての後方支援を行っており、登録プロジェクトやボランティア隊等多くの構成員の方々にご利用いただいております。

ここ遠野市は、過去に繰り返されてきた三陸沿岸地方の津波被害に対する「後方支援拠点」としての歴史的経緯があり、震災直後から市長の強力なリーダーシップの下、沿岸被災地への後方支援を即座に開始。現在では、多くの他県自治体・大学等が活動拠点を置き、「復興元年」には欠かせない「情報・スピード・連携」(自論)の更なる強化を図るべく、情報の収集・共有、産学官民の連携が行われています。

「遠野市に東京大学？」と来訪する各自治体・企業・NPOの方々、震災前は市民課窓口だった事から「住民票を下さい」と笑顔で訪れる遠野市民の方々と、日々「絆」を深めながら後方支援活動を行っています。



どんどはれ・・・
文: 赤崎公一

◆「どんどはれ」とは、遠野地方で昔話を語る際に最後に言う言葉。まんが日本昔ばなしでお馴染み「めでたし、めでたし」との意味で、物語の最後はハッピーエンドで終わる。

執筆者紹介: 救援・復興支援室遠野分室勤務(総合企画部企画課係長) 赤崎公一氏。東日本大震災にて実家(岩手県大槌町)が津波で全壊し、家屋・家財すべて流失。昨年7月より、妻と子(当時1歳)とマンションのローンを東京に残し、岩手県遠野市に移住。現在は、被災した母(65歳)と高校卒業以来の同居生活中。
連絡先: tohno-kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



平成24年度
学内広報
発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日 (校了)	配布
1424	3月30日 (金)	4月23日 (月)	4月27日 (金)
1425	4月27日 (金)	5月25日 (金)	5月31日 (木)
1426	5月31日 (木)	6月25日 (月)	6月29日 (金)
1427	6月29日 (金)	7月25日 (水)	7月31日 (火)
1428	7月27日 (金)	8月27日 (月)	8月31日 (金)
1429	8月30日 (木)	9月24日 (月)	9月28日 (金)

都合により変更になる可能性がありますので最新のスケジュールは下記URLよりご確認ください。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】



問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線 82032
E-mail: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

お知らせ

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

演習林の広報誌「科学の森ニュースNo.57」の発行

「科学の森ニュース」は3ヶ月に1回発行している演習林の広報誌で、3月10日(土)にNo.57を発行しました。演習林の最近の話題を始め、動植物や研究を紹介するシリーズも載っています。広報センター、農正門、農学生命科学図書館、弥生講堂等で配布している他、演習林のホームページからもご覧になれます。

～ 科学の森ニュース No.57 目次 ～ (トピックス)

- 銘木市で演習林産丸太に高評価
北海道演習林
- 研究科技術職員合同によるチェーンソー研修会開催
秩父演習林
- 千葉演習林で「秋の研修会」を開催
千葉演習林
- 公開講座「鳥の巣箱をつくろう！」を開催
樹芸研究所
- 〈クローズアップ〉
葉食性昆虫の多様性から森林の豊かさを測る
秩父演習林
- 〈演習林のイベントダイジェスト〉
〈科学の森の動植物紹介〉
ノボリリュウタケ
富士癒しの森研究所
- 〈コラム〉
林業の利益性を考える
千葉演習林 當山啓介

演習林のホームページ

<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>



お知らせ

情報基盤センター

「はじめての論文の探し方」・「自宅から検索するには？」 “情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

新学期のうちに講習会に参加して、文献の探し方の基本をマスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、定期的に、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

4月は、文献検索初心者におすすめ「はじめての論文の探し方」、学外からのデータベース・電子ジャーナル利用に内容を絞った「自宅から検索するには？」コースを実施します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※学外からの利用方法はどのコースでも説明します。



■ 4/6 (金) 12:20~12:40

■ 4/6 (金) 16:00~16:20

【自宅から検索するには?】(20分ワンポイント講習)
(同内容2回)

自宅や帰省・出張先など、学外からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ知りたい。そんな方にお奨めなのがこのコース。新年度に入る前に、学外からの利用法を確認しておきましょう。

ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gatewayサービスを紹介します。

一般に公開されている電子ジャーナルやデータベースもご案内。

同内容で2回実施しますので、ご都合のつくほうにご参加ください。

■ 4/11 (水) 15:00~16:00

■ 4/19 (木) 13:30~14:30

【はじめての論文の探し方】
(同内容2回)

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文(CiNii Articles)、英語論文(Web of Science)の基本的な探し方を実習します。

同内容で2回実施しますので、ご都合のつくほうにご参加ください。

●会場：本郷キャンパス総合図書館1階講習会コーナー
(ECCS無線LAN設定済みのノートPC持込OK)
定員17名

●参加費：無料

●予約不要 各回先着17名。直接ご来場ください。

※この他に、本学の図書館所蔵の本や雑誌を検索する「東京大学OPAC」の講習会も実施します。
(参照：別記事「“総合図書館オリエンテーション”実施のお知らせ」)

★授業・ゼミ・学生グループなど対象にオーダーメイドで講習します！

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です(無料)。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでもOKです。

過去の実施例は以下のURLでご覧いただけます。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★Litetopiメールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)



お知らせ

情報基盤センター

“総合図書館オリエンテーション”実施のお知らせ

本郷キャンパスにある「総合図書館」を知っていますか？活用していますか？

4月から5月上旬にかけて、下記の日程で“総合図書館オリエンテーション”を、総合図書館と情報基盤センター図書館電子化部門の共催で実施します。17時開始の日もありますので、ご都合のつく回にご参加ください。

春から初めて総合図書館を利用される方はもちろん、これまで利用したことのある方も、オリエンテーションに参加して、ぜひ総合図書館を使いこなしてください。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。

※英語コースもあります。留学生のみなさんにもお声かけください。

●集合場所：

本郷キャンパス総合図書館1階 総合案内カウンター
(予約不要。直接お越しください。)

●内容：(1コマだけでも参加OK)

・「OPAC入門」：東京大学OPACの使い方(蔵書検索)、

電子ジャーナルの探し方

- ・「利用案内」：総合図書館の利用案内
- ・「書庫案内」：総合図書館書庫の案内、利用法
- ・「国際資料室案内」：国際資料室の案内とインターネットによる検索

●参加費：無料

●日程：（1コマだけでも参加OK）

■ 4/10（火）

- 11:00-11:30 OPAC入門
- 11:30-12:00 利用案内
- 12:00-12:30 書庫案内

■ 4/12（木）

- 17:00-17:30 OPAC入門
- 17:30-18:00 利用案内
- 18:00-18:30 書庫案内

■ 4/17（火）

- 13:00-13:30 OPAC入門【英語コース】
- 13:30-14:00 利用案内【英語コース】
- 14:00-14:30 書庫案内【英語コース】

■ 4/18（水）

- 15:00-15:30 OPAC入門
- 15:30-16:00 利用案内
- 16:00-16:30 書庫案内

■ 4/19（木）

- 15:00-15:45 国際資料室案内

■ 4/20（金）

- 15:00-15:30 OPAC入門
- 15:30-16:00 利用案内
- 16:00-16:30 書庫案内

■ 4/23（月）

- 13:00-13:30 OPAC入門
- 13:30-14:00 利用案内
- 14:00-14:30 書庫案内

■ 4/24（火）

- 13:00-13:45 国際資料室案内

■ 4/25（水）

- 15:00-15:30 OPAC入門【英語コース】
- 15:30-16:00 利用案内【英語コース】
- 16:00-16:30 書庫案内【英語コース】

■ 5/9（水）

- 11:00-11:30 OPAC入門
- 11:30-12:00 利用案内
- 12:00-12:30 書庫案内



“General Library Library Tour in English”

Apr.17 (Tue.)

- 13:00-13:30 OPAC Course
- 13:30-14:00 Library Tour
- 14:00-14:30 Guide to the Stacks

Apr.25 (Wed.)

- 15:00-15:30 OPAC Course
- 15:30-16:00 Library Tour
- 16:00-16:30 Guide to the Stacks

It is not necessary to attend all 3 courses. Participants can join each course of 30 minutes.

The Library Tour will show you not only its rich collections but also materials and facilities provided for you, such as foreign newspapers, foreign TV, and computers.

The OPAC Course is an introductory course to online catalogs and e-journals. (This session offers a hands-on approach by using computers.)

No advance reservation is required. Free of charge.

Please come to the General Information Desk of the General Library (Hongo Campus) before the scheduled time.



※上記の他に、情報探索ガイダンス「はじめての論文の探し方」などの講習会も実施します。

(参照：別記事「「はじめての論文の探し方」・「自宅から検索するには？」「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ」)

●問い合わせ：

総合図書館 参考調査係

03-5841-2647 (内線：22647)

sanko * lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sogoto/>

情報基盤センター 学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy * lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第21回理学部公開講演会「理学最前線 彼方にひろがる大宇宙、きらめく生命の小宇宙。」の開催

宇宙のすがた、太陽系誕生の謎、生命活動の神秘。こうしたテーマがいつでも私たちを魅了して止まないのは、私たちがいったいどこから来たのか、という根本的な疑問に関係しているからかもしれません。そんな疑問に対峙し謎を解き明かすのが理学研究の醍醐味。今回は、宇宙分野・生物分野で第一線を走る研究者が、最新のトピックスにスポットを当てます。

日時：4月22日(日) 14:00~16:40 (13:00開場)

会場：本郷キャンパス 安田講堂

入場：無料 事前申し込み不要

どなたでもご参加いただけます。

定員：700名(当日先着順)

講演内容：

「加速する宇宙」

横山 順一(理学系研究科 附属ビッグバン宇宙国際研究センター 教授)

「膜蛋白質の立体構造の神経科学および創薬への展開」

濡木 理(理学系研究科 生物化学専攻 教授)

「はやぶさサンプルからわかってきた小惑星イトカワの素顔」

長尾 敬介(理学系研究科 附属地殻化学実験施設 教授)

中継：インターネット配信を予定。

主催・問い合わせ先：

大学院理学系研究科・理学部広報室

TEL：03-5841-7585

E-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL:<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL21>

お知らせ

附属図書館

平成24年度夏学期総合図書館備付け図書のおすすめについて

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員(常勤講師以上)から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、平成24年度夏学期に向けて下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

1 推薦の範囲

(1) 講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象とします。

(2) その他、学生の教養書としてふさわしいものをご推薦ください。

ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書は除いてください。

2 推薦締切り

講義に密着した図書は、平成24年4月27日(金)

その他の図書の推薦は常時受け付けます。

3 推薦方法

総合図書館備付け図書推薦要領によります。

※推薦要領は、各部局図書館(室)に備付けております。

4 問合せ先

附属図書館情報管理課選書受入係

内線：22626

e-mail: sen@lib.u-tokyo.ac.jp

*附属図書館Webサイト

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>

上記サイトの「ニュース」にある「総合図書館備付け図書の推薦について(04/02)」もご参照ください。

お知らせ

国際本部

日本語教育センター2012年度夏学期「一般日本語コース」開講のお知らせ

本センターでは、2012年度夏学期も「一般日本語コース」を開講します。本学の留学生、外国人研究者の方なら、どなたでも受講できます。多くの方の受講をお待ちしています。



●コース概要

開講期間：5月7日（月）～7月27日（金）

内容：2つの系統があります。

・「総合日本語」:

入門レベル（レベル1）から上級レベル（レベル5）まで。各レベル週3～2コマ。

・「テーマ別日本語」:

〈漢字〉〈中級会話〉など。週1コマ。

対象：東京大学の留学生、外国人研究者

* 〈レベル1〉から〈レベル3〉までのクラスと〈漢字〉のクラスは、配偶者も受け付けます。

受講料：無料。ただし、教科書のあるクラスは、自費で教科書を買ってください。

開講の場所：日本語教育センター
（本郷キャンパス・第2本部棟5階、1階）

選考：選考はありません。センターHP上で受講前のレベルチェックをして、自分でクラスを決めてください。時間割、教科書等の詳細は、センターHP上に掲載します。

●申し込みについて

* 以下は留学生が申し込む場合の情報です。外国人研究者、配偶者については、必要書類、申し込み期間が一部異なりますので、HPで確認してください。

申し込みに必要なもの:

- ①受講申込書
- ②写真2枚（4cm × 3cm）
- ③東大発行のIDカード

期間：4月9日（月）～11日（水）、18日（水）～20日（金）、13:30～15:30
先着順に受け付け、定員に達したら締め切ります。

申し込み場所：日本語教育センター
（本郷キャンパス 第2本部棟5階）

このほか、日本語教育センターでは、「集中日本語コース」「学術日本語コース」「短期日本語コース」などの各種コースを提供しています。くわしくはセンターHPをご覧ください。

●お問い合わせ:

申込方法等→日本語教育センター事務（留学生・外国人研究者支援課）内線：22564

授業内容等→日本語教育センター 内線：22563

<Homepage> <http://www.nkc.u-tokyo.ac.jp/>

<Twitter> <http://twitter.com/TodaiNihongoC/>

<Facebook> <http://www.facebook.com/TodaiNihongoC/>

< General Course -summer 2012- > offered by Center for Japanese Language Education [Nihongo Center]

The Center for Japanese Language Education will be offering the General Course. This course can be taken by any international student or foreign researcher at the University of Tokyo, provided that the application is made within the specified period. Won't you join us in the Japanese classes at the NIHONGO Center?

● Outline

Term: From May.7 (Mon.) to July 27(Fri.)

Contents: This course is divided into two tracks, 〈Comprehensive Japanese〉 and 〈Specific Japanese〉.

〈Comprehensive Japanese〉: Six levels, ranging from introductory (Level 1) to advanced (Level 5). Two or three times a week (100 minutes each time).

〈Specific Japanese〉: Classes focused on the specific

skills of kanji and intermediate conversation. One session on each.

Potential Applicants: International students and foreign researchers at the University of Tokyo.

* Foreign spouses of international students or foreign researchers at the University of Tokyo may also enroll in some classes: <Level 1> to <Level 3> and <Kanji>.

Tuition: There is no tuition fee.

However, you will have to purchase the textbooks for the classes yourself as required.

Class Location: Center for Japanese Language Education (Adm. Bureau # 2, 5th and 1st floor, Hongo)

Selection: There is no selection criterion.

Please determine the level of the course you wish to take by yourself by using the results of the placement test offered on the Center's homepage.

For further information, such as timetables, textbooks etc., please refer to the Center's homepage.

● Registration Details

* The following information is specific to foreign students. For details regarding foreign researchers and spouses, please refer to the Center's homepage.

Necessary documents for Registration:

- (1) Application Forms
- (2) 2 copies of photo (4cm×3cm)
- (3) ID card issued by the U-Tokyo

Registration Period:

From April 9th (Mon.) to 11th (Wed.), and from April 18th (Wed.) to 20th (Fri.)

* Applications will be accepted on a first-come-first-served basis until the class becomes full.

Registration Time:

From 1:30 to 3:30 pm during the registration period stated above

Registration Place:

Center for Japanese Language Education (Adm. Bureau # 2, 5th floor, Hongo Campus)

The NIHONGO center provides various opportunities - Intensive Japanese Course, Academic Japanese Course and Short-term Japanese Course, etc. - to learn Japanese for international students and foreign researchers. Please visit our website and find a course that fits with your schedule and learning needs.

We are looking forward to seeing you in the NIHONGO Center.

<Homepage> <http://www.nkc.u-tokyo.ac.jp/>

<Twitter> <http://twitter.com/TodaiNihongoC/>

<Facebook> <http://www.facebook.com/TodaiNihongoC/>

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第75回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第75回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、本学大学院理学系研究科の大場広輔博士による、コウシンソウについての講演です。コウシンソウは我が国固有の食虫植物で、日光周辺の間山、それも懸崖にのみ生育しています。コウシンソウの特異な生態に関する最新の研究成果に触れ、またこの貴重な植物が現在置かれている状況と保全に向けた活動を知る絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お問い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：大場 広輔（本学大学院理学系研究科）

演題：「我が国固有の食虫植物コウシンソウの今昔とこれから - 保全に向けた取り組み -」

日時：5月12日（土）14時～16時

場所：理学系研究科附属植物園日光分園（日光植物園）
庁舎

参加費：無料（但し、一般の方は入園料が必要です）

参加申込方法：5月7日（月）までに、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会

koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園

杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

お知らせ

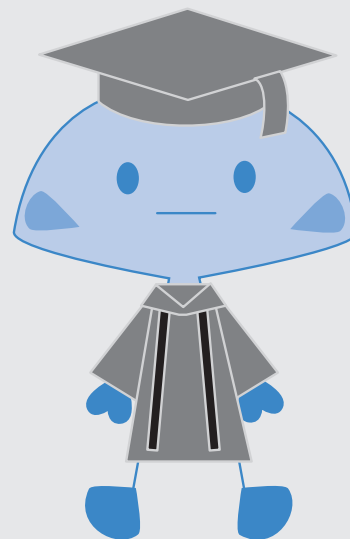
ハラスメント相談所

リーフレットをリニューアルしました！

ハラスメントの具体的な例など、分かりやすく載せました。詳細は、ハラスメント相談所のホームページをご覧ください。



(左) 表紙 (右) リーフレットの内容



東京大学ハラスメント相談所

TEL : 03-5841-2233

E-mail : soudan@har.u-tokyo.ac.jp

HOME > 東京大学の活動 > キャンパスマナー・相談 > ハラスメント防止 > ハラスメント防止・啓発リーフレット等

川邊正樹教授

本学教授川邊正樹先生は、平成24年1月29日の朝に御自宅で倒れられ、57歳で逝去されました。周りの者が全く予期していなかった、突然の旅立ちでした。

先生は、神奈川県川崎にお生まれになり、栄光学園中学校・高等学校を経て昭和47年に東京大学に御入学されました。昭和51年に理学部地球物理学科を御卒業になり、その後大学院に進学され、昭和57年に理学博士の学位を授与されました。昭和56年には海洋研究所の助手に採用され、平成4年に海洋研究所海洋物理学部門の助教授、平成16年には海洋研究所海洋物理学部門の教授に昇任されました。観測に基づく海洋の研究と教育に邁進される一方、日本海洋学会、日本学術会議の各委員会、「気候のための海洋観測パネル」等、数多くの委員を務められ、我が国の海洋研究の推進と発展に大きく貢献されました。

1980年代から90年代にかけて、先生は日本の南岸を流れる黒潮の流路変動に関して、当時の海洋の数少ない時系列データであった潮位データを船舶観測による水温データとともに解析することにより、黒潮の流路変動が三つの代表的流路とそれらの間の規則的な遷移によって理解できることを明らかにされました。また、観測データと力学モデルを用いた研究により、九州南のトカラ海峡における黒潮の流速、流量、および位置



が日本南岸の流路変動に重要な役割を果たしていることを解明されました。これらの研究成果は、その後の黒潮研究の礎となる貴重なものであり、その功績により、昭和61年に日本海洋学会岡田賞を、平成14年に日本海洋学会賞を受賞されました。

1990年代の終わりから先生は、主要な研究対象を北西太平洋の深層循環へと移されました。遠く大西洋北部に端を発し、太平洋の海底近くを南極海から北上する深層循環は、大量の熱や物質を運ぶことにより気候変動に大きく影響しています。先生は過去十数年間にわたり、学術研究船白鳳丸を用いた大型の観測航海をたびたび率いられ、水温・塩分等の精密観測や係留観測を実施され、それまでほとんど未解明だった深層循環の流路と流量を体系的かつ詳細に示されました。さらにこの数年間は、海底近くを北上した深層循環が北東太平洋で中深度に湧き上がり再び南極海の方へと戻っていく「オーバーターン」の研究に取り組みました。白鳳丸によるオーバーターンのメカニズム解明のための航海を昨夏と今秋の2度計画されていましたが、自分が率いる最後の航海になるとおっしゃっていた今秋の航海を前に突然倒れられ、さぞかしご無念だったことと拝察いたします。

先生は海と動物をこよなく愛され、現場観測に基づいた海洋研究と研究者育成を非常に大切にされてきました。妥協を知らず、ご自分にも周りにも厳しかった先生の研究スタイルは、教えを受けた多くの者の胸に刻まれております。

ここに先生のご功績とお人柄を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(大気海洋研究所)

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（採用）			
24.2.16	小松 一生	大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設准教授	大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設特任講師
（昇任）			
24.2.16	田野井 慶太郎	大学院農学生命科学研究科准教授	生物生産工学研究センター助教
24.3.1	菅谷 誠	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
24.3.1	吉田 亮	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
24.3.1	本郷 和人	史料編纂所教授	史料編纂所准教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

02 「Todai Research」始めました。

NEWS

一般ニュース

- 08 本部評価・分析課
平成24年度 専攻の設置等について
- 08 環境安全本部／本部労務・勤務環境課
東京大学メンタルヘルスセミナーを開催
- 09 高齢社会総合研究機
柏市豊四季台団地へ野田総理が視察
- 10 情報システム本部
情報セキュリティセミナー開催される！
- 11 国際本部
日本語教育センター2011年度冬学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式が行われる
- 12 産学連携本部
技術の融合によるイノベーション創造を求めて
一第2回「国際産学連携フォーラム」を開催
- 13 本部留学生・外国人研究者支援課
本学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会
- 14 本部入試課
平成24年度外国学校卒業学生特別選考の第1次選考合格者が決まる
- 15 本部入試課
第2次学力試験（前期日程・後期日程）の出願受付終わる
- 16 本部入試課
平成24年度第2次学力試験（前期日程）第1段階選抜合格者が決まる

部局ニュース

- 17 退職教員の紹介
- 38 大学院農学生命科学研究科・農学部
平成23年度留学生関連行事の実施
- 38 宇宙線研究所
一連の「大型低温重力波望遠鏡着工記念行事」を挙行
一望遠鏡の愛称「かがら（KAGRA）」を公表
- 39 生産技術研究所
「第9回東京大学学生発明コンテスト」表彰式行われる！
- 40 大学院教育学研究科・教育学部
教育学部附属中等教育学校で日本双生児研究会第26回学術講演会が開催される
- 41 大学院新領域創成科学研究科
第10回新領域創成科学研究科「市民講座」開催
「海洋の再生可能エネルギーの開発」
- 42 大学院農学生命科学研究科・農学部、分子細胞生物学研究所
生命科学総合研究棟B竣工記念式典を開催
- 43 大学院教育学研究科・教育学部
「第19回教育学部音楽祭」開催される
- 43 大学院農学生命科学研究科・農学部
「第二回 放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会」が開催される
- 44 史料編纂所
在外日本関係史料をめぐる国際研究集会および古写真展示会を開催

◆表紙写真◆

人工孵化したニホンウナギの変態期仔魚
(02ページに関連記事)

- 45 情報基盤センター
ローレンス・リバモア国立研究所副所長が情報基盤センターを訪問

コラム

- 46 【新連載】再生のアカデミズム<実践編> #01
- 47 総長通信 President's Improvisation Vol.7
- 48 ひょうたん島通信 第3回
- 49 決算のDOOR ～数字が語る東京大学 第18回
- 49 インタープリターズバイブル vol.56
- 50 Crossroad 産学連携本部だより vol.76
- 51 Policy + alt vol.30
- 52 ASIAN DIVERSITY No.17
- 52 コミュニケーションセンターだより No.86
- 53 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第73回
- 54 救援・復興支援室より No.10

INFORMATION

お知らせ

- 55 大学院農学生命科学研究科・農学部
演習林の広報誌「科学の森ニュースNo.57」の発行
- 55 情報基盤センター
「はじめての論文の探し方」・「自宅から検索するには？」「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ
- 56 情報基盤センター
“総合図書館オリエンテーション”実施のお知らせ
- 58 大学院理学系研究科・理学部
第21回理学部公開講演会「理学最前線 彼方にひろがる大宇宙、きらめく生命の小宇宙。」の開催
- 58 附属図書館
平成24年度夏学期総合図書館備付け図書の推薦について
- 59 国際本部
日本語教育センター2012年度夏学期「一般日本語コース」開講のお知らせ
- 60 大学院理学系研究科・理学部
第75回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 61 ハラスメント相談所
リーフレットをリニューアルしました！

訃報

- 62 川邊正樹教授

事務連絡

- 62 人事異動（教員）

淡青評論

- 64 力が試されているとき

編集後記

今月の特集は Todai Research のご紹介！ このサイト、昨年 10 月のオープン以来、東大の研究を紹介する魅力的なコンテンツを着々と蓄積しています。ぜひ、ご一読を。さらに、注目すべきは新連載の『再生のアカデミズム<実践編>』。被災地復興のために始まった様々な学術活動を紹介していきますので、乞う、ご期待！ あ、まだ、あった……連載『救援復興支援室だより』に今月から、遠野分室・赤崎係長のエッセイが掲載されます。題して『遠野（分室）ものがたり』。震災から 1 年が経ちましたが、学内広報はこれからも復興に関するトピックを提供し続けていきます。（し）



七徳堂鬼瓦

力が試されているとき

去年の3月11日の地震からもう1年が経ちました。東京では、震災が既に過去の出来事であるかのようにも思える日常が戻ってきています。そんな日々の生活に流されながらも、あの時の無力感を忘れてはいけないと思うのです。

地震と津波。避難する人々を追いたてるようなベントそして爆発。大量に放出された放射性物質と被曝。各地で計測される高い放射線量、そしていたるところから検出される放射性物質。先の見えない原発災害の一連の

経過のなかで、人々は私たち東京大学の人間に何を期待したでしょうか。

そこで今何が起きているのか。最悪の事態の進行を止める手だてではないのか。どうすれば自分やまわりの人の身を守れるのか。本当のことを教えて欲しかったのではないですか。私たちはそれにどう応えることができたのでしょうか？

科学と科学者によせる人々の信頼は、原子炉建屋とともに崩れていったように私には感じられます。深刻な放射能汚染の現状を何とかしたいという心ある方々の発言と行動には勇気づけられますが、今も人々は私たちの答えを待ち続けているのではないですか？

放出されてしまったもの、管理されているもの、そして原子炉の底に融け落ちているもの。私たちがこれからずっと、大量の放射性物質にとりかこまれて暮らしていかなくてはいけないことは、いくら目をそらそうとしても消えてくれない現実です。この現実のなかで私たちは何をすべきなのでしょうか？

どうしてこうなったのか。知識や情報が切実に求められているときになぜそれに答えられなかったのか。どうすれば放射能から身を守り子どもたちを守れるのか。放射能に汚染された環境で元のような暮らしをとりもどせるのか。放射能がひきおこす差別のない社会をどう作っていくのか。原発災害を2度とくり返さないために私たちに何ができるのか。答えなくてはならない問題は山のようにあります。

私たちひとりひとりがどう立ち向かい答えていくのか。専門家として、科学者として、そして市民としての力が試され続けています。

斎藤 毅（大学院数理科学研究科）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1423 2012年3月26日

東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp/